JAPRS

JAN.2018 No.1

新春号

一般社団法人　日本音楽スタジオ協会

目　次

会長年頭挨拶 1

2017年JAPRS企業説明会レポート 2

第18回JAPRS新プロ・エンジニア養成セミナーレポート 4

平成29年度通常総会＆懇親会レポート 6

第16回JAPRS認定「サウンドレコーディング技術認定試験」実施報告 8

第13回スタジオ見学会レポート 9

第14回JAPRS認定「Pro Tools技術認定試験」実施報告 11

第29回JAPRSゴルフコンペ 12

Inter BEE 2017賛助会員社ブースツアーレポート 13

JAPRS技術セミナー / 3Dオーディオ Dolby Atmos勉強会レポート 15

JAPRS技術セミナー / ステレオ＆サラウンドマイキング勉強会レポート 26

第24回日本プロ音楽録音賞授賞式レポート 33

第24回日本プロ音楽録音賞審査委員講評 44

「音の日のつどいパーティー」レポート 55

会員動向 57

会長年頭挨拶

（一社）日本音楽スタジオ協会
会長　高田　英男

明けましておめでとうございます。
日本音楽スタジオ協会を代表し、謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

当協会は1990年に社団法人化して以来、本年で設立29年目を迎えることとなりました。
この間6期12年にわたり会長の責務を果たされた内沼映二・前会長（現・名誉会長）の後任として、一昨年6月より会長を務めさせていただいておりますが、音楽創造のサイクルの一翼を担う集団としての在り方を見直し、本年も更に前進することを責務として努めていく所存です。

さて、音楽制作の現場ではデジタル技術の進化に伴い、様々な利便性の追求とともに、音楽ソフトが配信を含めた多様な形でユーザーに発信される現在、ハイレゾ録音や3Dオーディオに関する基本的な録音技術の探究と最新のデジタル技術による新たな音創りへのチャレンジが重要な時代となってきました。
このような動向を十分に意識し、我々はプロフェッショナルな音楽スタジオの集団として、次世代に向けたスタジオ創りと更なる良質な音源の発信、将来を担うエンジニアの人材育成を課題とし前進していくことが責務と考えています。

本年も皆様のご支援、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

2017年JAPRS企業説明会レポート

平成29年5月13日（土）、レコーディングスタジオへの就職を目指して専門学校に在籍する学生を対象とした合同企業説明会が専門学校ESPミュージカルアカデミーで開催されました。この催しも今回で17回目を迎えることとなり、ＪＡＰＲＳの公式行事として定着している。

一部12号館 B2F Club 1ne 2wo

参加学生は、仙台、名古屋、大阪からの学生を含めて118名が参加。また、出展側からは、正会員スタジオ８社と賛助会員２社、関連会社１社から19名の参加により実施された。

定刻13時より同校の12号館 B2F　Club 1ne 2woにて参加者全員が集い、高田会長および吉田保専門学校委員会委員長より挨拶の後、引き続いて、参加企業各社が自社の概要を紹介。

その後、説明会会場を各ブースに移し、二部がスタート。一回あたりの説明時間を30分とし、前半の３回は協会で指定した出展ブースで参加企業からの説明を受け、15分の休憩後、後半の２回は各自が希望する企業ブースでの説明を受ける方法で実施した。

高田会長

専門学校委員会
吉田委員長

リクルートスーツに身を固めた熱心な学生たちが説明に耳を傾け、メモを取り、質問をする光景が見られました。

予定時刻の17時に５回目の説明が無事に終わり、企業説明会が終了。

報告の最後に、ご出展いただいた企業の皆様に心より感謝申し上げます。

（株）青葉台スタジオ

（株）エムアイティギャザリング

（株）音響ハウス

（株）キング関口台スタジオ

（株）サウンドインスタジオ

（株）サウンド・シティ

（株）バーディハウス

（株）ミキサーズラボ

オタリテック（株）

（株）メディア・インテグレーション

ヒビノ（株）

出展企業は以下のとおり・・・

（株）青葉台スタジオ	スタジオマネージャー	高橋　孝典
（株）エムアイティギャザリング	代表取締役	横山　　武
（株）音響ハウス	技術部統括部長	織田　泰光
	経理総務部	大内　晴樹
（株）キング関口台スタジオ	経営本部長代理兼管理統括部長	高橋　邦明
	ブッキング マネージャー	三木　康広
（株）サウンドインスタジオ	管理部長	奥原　秀明
（株）サウンド・シティ	営業部部長	明地　　権
	オーディオ技術部 部長	中澤　　智
	MA 課 課長	末次　亮介
（株）バーディハウス	レコーディングエンジニア	森　　和孝
	〃	茂古沼　良馬
（株）ミキサーズラボ	取締役	中村　隆一
	営業部	鐘ヶ江　宝
オタリテック（株）	営業部　部長	砂田　陽一
	技術部　部長	中村　朋博
	システム部　部長	溝渕　　匠
（株）メディア・インテグレーション	取締役	岡田　詞朗
ヒビノ（株）	ヒビノ GMC　人事企画課	井川　郁香

第 18 回 JAPRS 新プロ・エンジニア養成セミナーレポート

平成 12 年第 1 回目を開催して以来、今年で 18 年目を迎えたのが、この新プロ・エンジニア養成セミナーです。

専門学校委員会の主催により実施されているこのセミナーは、JAPRS 賛助会員加盟専門学校 19 校の 2 年生以上を対象として、東京地区、大阪地区正会員スタジオの協力により継続されているもので、プロのレコーディングスタジオにおけるセッション開始前のスタジオセットアップおよびミックスダウン･デモを体験させることを主目的としています。

また、今年から名古屋地区でも開催することとなり、名古屋ビジュアルアーツを会場とし、会員以外の専門学校等からの参加も募った。

今回は、6 月 3 日（土）、10 日（土）、10 月 7 日（土）で大阪地区 1 日 1 回、東京地区 1 日 3 回、名古屋地区 1 日 3 回開催。

実施内容

①アシスタントエンジニアによるスタジオブースの説明
②アシスタントエンジニアからのアドバイス
③ミックスダウンのセットアップ
④ミックスダウン・デモ
　2ch バランス・2ch メーターの確認　EQ の使用方法　DYN・INS 系の使用方法
　クロス・パッチ等　AUX 系のエフェクタ・バランス トータル処理の方法

大阪地区会場

（6 月 3 日（土）於：スタジオグルーヴ Ast）
参加者：3 校　14 名
エンジニア：吉田　保 氏
アシスタントエンジニア：金子　拓人 氏、阪本　真優 氏

東京地区会場

（6 月 10 日（土）於：サウンドインスタジオ Bst）
参加者：6 校 38 名
エンジニア：吉田　保 氏
アシスタントエンジニア：稲垣　杏理 氏
サポート：椎葉　爽 氏

名古屋地区会場

（10 月 7 日（土）於：名古屋ビジュアルアーツ Pixy Studio）
参加者：5 校 54 名
エンジニア：吉田　保 氏
アシスタントエンジニア：稲垣　杏理 氏
サポート：西村　空知 氏

タイムスケジュール

大阪会場：スタジオグルーヴ Ast

6月3日（土）

1回目　14:00 ～ 16:15

スタジオグルーヴ Ast

サウンドインスタジオ Bst

東京会場：サウンドインスタジオ Bst

6月10日（土）

1回目　10:00 ～ 12:15

2回目　13:00 ～ 15:15

3回目　15:30 ～ 17:45

名古屋会場：名古屋ビジュアルアーツ Pixy Studio

10月7日（土）

1回目　10:30 ～ 12:45

2回目　13:30 ～ 15:45

3回目　16:00 ～ 18:15

名古屋ビジュアルアーツ Pixy Studio

平成 29 年度通常総会＆懇親会レポート

＜通常総会＞

6 月 9 日（金）、JAPRS は港区元赤坂の明治記念館 1 F「千歳の間」において、平成 29 年度通常総会を開催し、平成 28 年度の事業報告書（案）、収支決算報告書（案）、平成 29 年度事業計画書（案）及び収支予算書（案）に関し正会員に諮り、全ての議案が異議なく全員一致で承認された。

高田 会長

はじめに、佐藤専務理事が定足数の確認を行い、書面表決書を含む 35 名の出席数を確認（定足数）、総会の開会を宣言した。

続いて高田会長が議長に当たり、議事録署名人として常任理事の明地 権氏、監事の清水 三義氏の両名が選出された。

次に佐藤専務理事より第 1 号議案「平成 28 年度事業報告書（案）」及び「収支決算報告書（案）」について説明が行われ、審議の結果、異議なく全員一致で承認された。

続いて佐藤専務理事より第 2 号議案「平成 29 年度事業計画書（案）」及び「収支予算書（案）」について説明が行われ、審議の結果、第 1 号議案と同様に全員一致で承認された。

最後に議長である高田会長が閉会を宣し解散した。

総会

＜懇親会＞

経済産業省
伊藤桂 氏

通常総会終了後、18:30 より明治記念館 1 F「末広の間」において、正会員、準会員、賛助会員及び招待者を含む 74 名が集い、懇親会が開催された。

司会進行は総務委員会の中村 隆一氏（(株) ミキサーズラボ）が担当し、高田会長の挨拶に続き、経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 課長補佐　伊藤桂氏により来賓代表として挨拶が述べられた。

続いて乾杯となり、恒例により本年から法人正会員として新たに入会された株式会社 キング関口台スタジオ 経営本部長代理 兼 管理統括部長 高橋 邦明氏により乾杯の発声が行われ、歓談タイムとなる。

キング関口台スタジオ
高橋邦明 氏

静永秀宏 氏

山梨忠志 氏

歓談タイムの途中、６月９日付で賛助会員・日本音響エンジニアリング（株）代表取締役 静永 秀宏氏の退任と、後任として代表取締役に就任された山梨 忠志氏より挨拶が行われた。

更に歓談が続くうちに中締めの時間となり、総務委員会・清水委員長による挨拶が行われ、本年の懇親会も無事に終了となりました。

清水委員長

スタッフとして開宴前より準備にご協力いただいた会員の皆様、有難うございました。

懇親会

第 16 回 JAPRS 認定「サウンドレコーディング技術認定試験」実施報告

７月２日（日）、札幌×２、仙台×２、郡山、東京×９、名古屋×３、大阪×３、広島の７地区 21 ヶ所の団体受験会場に分散して実施された「第 16 回サウンドレコーディング技術認定試験」については、当初の受験申請者数 572 名に対し、欠席者 59 名を除く当日の受験者数 513 名の参加により実施されました。

試験内容は例年通り四者択一マークシート方式で、音響の理論／電気音響とスタジオシステム／レコーディング技術と先進技術／音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史などの４ジャンルから各 25 問（計 100 問､1000 点満点）が出題されましたが、平均点は 765.6 点という結果になりました。

専門学校名古屋ビジュアルアーツ

以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

（１）受験申請者 572 名　欠席 59 名　受験者 513 名
　　最低点 210 点　最高点 1000 点（35 名）　平均点 765.6 点

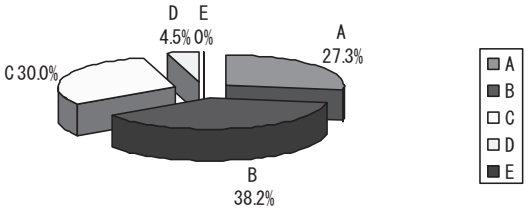
（２）平均点詳細（各ブロック 250 点満点）
　Ⅰ. 音響の理論
　　正答率　81.6%　平均点　204 点
　Ⅱ. 電気音響とスタジオシステム
　　正答率　76.5%　平均点　191 点
　Ⅲ. レコーディング技術と先進技術
　　正答率　76.2%　平均点　190 点
　Ⅳ. 音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史など
　　正答率　72.0%　平均点　180 点

（３）得点別人数

1000 ～ 900	153 名
890 ～ 800	86 名
790 ～ 700	108 名
690 ～ 600	70 名
590 ～ 500	54 名
490 ～ 400	29 名
390 ～ 300	11 名
290 ～ 200	2 名
200 ～	0 名
計	513 名

（４）ランク別人数

Ａランク	1000 ～ 901 点	140 名
Ｂ　〃	900 ～ 701 点	196 名
Ｃ　〃	700 ～ 451 点	154 名
Ｄ　〃	450 ～ 201 点	23 名
Ｅ　〃	200 点以下	0 名
	計	513 名



第13回スタジオ見学会レポート
アバコクリエイティブスタジオ

株式会社　若林音響
若林　豪之

恒例のスタジオ見学会も多くの都内スタジオで開催され、残すところ指折り数える程度の件数となっていました。アバコクリエイティブスタジオ様は、早くから見学会の候補に挙がっている都内屈指の大部屋を所有されるレコーディングスタジオですが、建屋耐震工事と重なりスタジオ見学会の開催が中々実現しない状況が続いておりました。

アバコクリエイティブスタジオ様304stは、弊社にて設計・施工させて頂いた事もあり、スタジオ見学会の開催を大変待ち望んでいた一人ではございますが、私が入社する以前の施工案件であった為、年始のご挨拶でエントランスまでしか立ち入ったことの無い私を興味津々にさせるスタジオ見学会となりました。

耐震工事の影響にてスケジュールが厳しい中、今回この様な貴重な体験をさせて頂けたことは、関係された全ての方々に感謝し、この場をお借りして、お礼申し上げます。ありがとうございました。

301st

私が最初に足を踏み入れたのは、国内最大規模の大空間301stメインフロアーでした。

冒頭、松本 登様（株式会社アバコクリエイティブスタジオ代表取締役社長）よりご挨拶と設立に関する説明を受け、アバコクリエイティブスタジオは1949年、視聴覚技術の発展のため、NCC（National Christian Council Japanの略称、日本キリスト教協議会）の視聴覚部門として設立され、Audio（聴く）Visual（視る）Activities Commission（事業部）の頭文字をとってAVACO（アバコ）という名称になったそうです。

1982年、録音スタジオ部門がアバコクリエイティブスタジオとして独立し、映像制作業務も開始されましたとお話し頂きました。流石の松本社長も設立当初は、入社されていなかったそうです。

301stコントロールルーム

私が生を受ける以前の1950年代よりスタジオ業務が行われている旨お話を伺い、色々な意味で感慨深く歴史を感じた次第です。

以前聴いた話ですが、同敷地内にあるアバコ教会で結婚式を挙げた足で、そのままスタジオ入りしてフェーダーを握ったエンジニアさんが居るとか！

話は戻りまして最初に踏み入れた301stは、60人のオーケストラ録りが可能な国内最大スペースであり、ステージ背面壁から天井へと続く波形形状の音響内装形状は、目を見張る迫力があります。

オケ録りを目的としたスタジオ案件では、必ず「アバコの 301st サイズ」と名前が挙がる事が今なおあります。

302st コントロールルーム

続いて見学が行われたのが 302st です。302st はメインフロアーの天井高が 7m と高く非常に自然な響きが部屋全体を覆う音場でありながら、壁面の吸音層で部屋の癖や余分な反射を感じさせない、オケもバンドも収録できる豊かな響きが印象的でした。

ControlRoom へのアクセスも兼ねた Booth は、ソロパートや Amp Booth としても使用でき、メインステージ脇の Booth も大型の窓が設けられており、Control Room からの視認性の高さは設計者の配慮を非常に強く感じました。

コントロールルームに設置される SSL 4000G は非常に良いコンディションで、試聴を行って頂きましたが、CBS SONY 製の Large Monitor が奏でる定位の良さにはエンジニアでない私でも息を呑む体験でした。

304st コントロールルーム

さて、見学会も終盤にさしかかり次に拝見したのは 304st です。304st は 5 畳サイズの Booth と Control Room の組み合わせで、Large Speaker での 5.1ch Mix に対応したスタジオです。

冒頭でも記載いたしましたが、この 304st は弊社にて改修工事を監修・設計・施工させて頂いております。改修工事を行ったのが 1989 年～ 1990 年であり、当時としては 5.1 Surround Mix に対応した先駆けのスタジオであった旨、入社当初より会社の先輩より耳にタコができるほど聴かされております。今では常識となっている「ITU-R BS.775-1 」ですが、ITU-R 勧告が 1992 年であった事を考慮すると、Rear Surround Speaker の配置角度など設計者もレコーディングエンジニアも相当な苦労をしたと想像します。ましてや SONY 製の特注 Large Speaker での Surround 構成です。当事者の苦労が目に浮かびます。

（株）アバコクリエイティブスタジオ
松本登氏

（株）アバコクリエイティブスタジオ
柏倉吉紀氏

最後に「エントランスから先のアバコスタジオの内部に足を踏み入れる夢」を経験させて頂けた松本社長さまと、各スタジオの説明を担当していただいた柏倉さまへ改めてお礼申し上げます。有意義な時間を過ごせた見学会でした。ありがとうございました。

第 14 回 JAPRS 認定「Pro Tools 技術認定試験」実施報告

9月10日（日）、札幌×２、仙台×２、盛岡、小山、東京×７、横浜、名古屋×２、大阪×３、広島、博多の10地区21ヶ所の団体受験会場に分散して、「第14回JAPRS認定Pro Tools技術認定試験」が実施されました。本年度の受験者数は、昨年度の564名に対して523名という結果となりました。

また、今回の試験については昨年と同様に受験者個々のPro Toolsに関する知識をより明確に把握するために、初級50問（500点）、中級50問（500点）の出題構成とし、それぞれ「Pro Tools概要」「録音･編集」「ミキシング」「シンク・MIDI・用語集など」に区分された出題としたが、初級問題の正答率は71.5％、中級問題については57.8％、全体的な正答率は64.6％という結果になりました。以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

東放学園音響専門学校

専門学校 HAL 東京

（１）受験申請者598名　欠席75名　受験者523名
　最低点220点　最高点1,000点（12名）　総合平均点646.3点

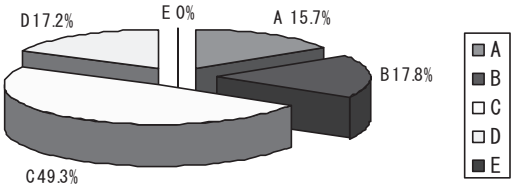
（２）平均点詳細
　初級１（Pro Tools概要／130点）：97.2点
　初級２（録音・編集／110点）：82.6点
　初級３（ミキシング／140点）：94.7点
　初級４（シンク・MIDI・用語集など／120点）：82.8点
　◆初級計357.3点
　中級１（Pro Tools概要／120点）：81.5点
　中級２（録音・編集／110点）：52.6点
　中級３（ミキシング／110点）：62.4点
　中級４（シンク・MIDI・用語集など／160点）：92.6点
　◆中級計289.0点

（３）得点別人数

1000～900	87名
890～800	43名
790～700	55名
690～600	110名
590～500	98名
490～400	90名
390～300	30名
290～200	10名
200～	0名
計	523名

（４）ランク別人数

Aランク	1000～901点	82名
B　〃	900～701点	93名
C　〃	700～451点	258名
D　〃	450～201点	90名
E　〃	200点以下	0名
	計	523名



第 29 回 JAPRS ゴルフコンペ

10 月 20 日（金)、昨年に続き神奈川県厚木市の大厚木カントリークラブ桜コースにおいて、第 29 回目を迎えた JAPRS ゴルフコンペが開催された。参加者は JAPRS 法人正会員 9 社 13 名、個人正会員 2 名、賛助会員 4 社 5 名、JAPRS 会員 OB 2 名、関連会社等 8 名 合計 9 組 30 名で、早朝 8:00 に全員遅刻者もなくクラブハウスの受付が完了しました。

8：45 にクラブハウス前集合となり、コンペ幹事の (株) ソナ・萩原 一哉氏よりルール等の説明の後、参加者全員の記念写真を撮影後に IN、OUT コースに分かれ、無事にコンペがスタート。

競技終了後、クラブハウス 2F においてパーティーが開催され、本年度の優勝者・佐藤茂氏をはじめ、各賞が参加者に手渡され、最後に清水総務委員長の挨拶が行われ、無事にコンペ終了。

優勝・佐藤 茂 氏

クラブハウス・パーティー会場

清水委員長

＜主な成績＞

優　勝：佐藤 茂／フリーミキサー	GROSS 96	NET 72.0
準優勝：北村　勝敏／ミキサーズラボ	〃　97	〃　73.0
３　位：伊藤　　猛／バーディハウス	〃　87	〃　73.8
ベストグロス賞：大野　昌寛／キング関口台スタジオ	GROSS 84	
ニアピン賞：高根 護康、明地 権、加藤 英雄、酒井 努		
ドラコン賞：藤井 政直、三浦 瑞生、佐藤 尚、明地 権		（敬称略）

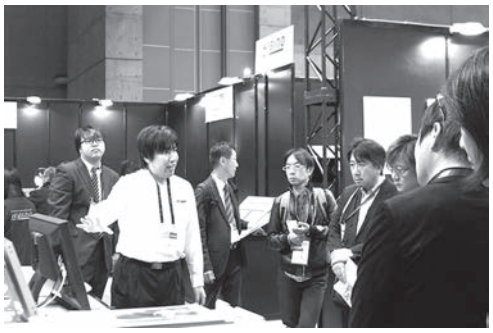
スタート前の集合写真

Inter BEE 2017 賛助会員社ブースツアーレポート

株式会社メディア・インテグレーション
岡田　詞朗

2017 年 11 月 15 日（水）から 11 月 17 日（金）の 3 日間に渡り、幕張メッセ（千葉市美浜区）にて第 53 回 2017 年国際放送機器展が開催されました。

ここ数年増大傾向にある出展者数は今年も記録を更新し、昨年の 1.090 社から 1.139 社（うち海外 33 カ国・地域から 643 社）に増加、1.983 小間（昨年は 1.926 小間）が展開されていました。さらに昨年 1965（昭和 40 年）年のスタート以来過去最多を記録した登録来場者数を今年も僅かに更新し 38.083 名（昨年は 38.047 名）となりました。



2017 年は「WHAT WILL YOU DO NEXT? − 新たなメディアの可能性を世界に伝えよう。」をスローガンに掲げて開催、2017 年から 2019 年までの 3 ヶ年をひとつのスパンとして捉え、デジタル・トランスフォーメーション時代におけるメディア産業の新たなユーザエクスペリエンスを提示する場として、「コンテンツ」を中核に位置づけ、今後 3 ヶ年でコンテンツを「つくる（制作）」「おくる（伝送）」「うける（体験）」の技術要素を網羅した「メディア総合イベント」に変容することを目指しての開催となりました。昨年同様の「プロオーディオ部門」、「映像表現／プロライティング部門」、「映像制作／放送関連機材部門」、「ICT ／クロスメディア部門」の 4 展示部門構成に加え、新たな映像表現を訴求する「INTER BEE IGNITION」、音響体験デモコーナー「INTER BEE EXPERIENCE」、コンテンツ制作最前線を披露する「INTER BEE CREATIVE」、放送通信連携の最新動向を紹介する「INTER BEE CONNECTED」等多彩なコンファレンスが同時に開催され、盛況のうちに 3 日間の幕を閉じました。

そして期間中の 11/16（木）に 5 回目となる「Inter BEE 2017 賛助会員社ブースツアー」を今年も行わせて頂きました。今年は賛助会員 18 社が対象で、昨年同様午前と午後の部に分けての進行、10 時 30 分～ 14 時 30 分の予定範囲内で実施出来ました。今年は展示会場の Hall 8 から Hall 1 までの全てが対象となり過去最長の距離間となりましたが、進行の慣れもあり大きなトラブルもなく、進行ができました。ここ数年出展者数が増加しておりますので、かなり入念な下調べをしないと、なかなか全ての興味のある出展先を回ることが難しい状況ですので、今回「Inter BEE 2017 賛助会員社ブースツアー」にご参加頂いた方には効率良く会場を閲覧できる点が良いとコメント頂けた点がとても印象的でした。

最後になりますが、ご協力頂きました事務局の方々、賛助会員各社のご担当者様、そしてツアーに参加頂いた方々、ありがとうございました。

Inter BEE 2017 賛助会員社ブースツアー参加賛助会員 18 社

1．伊藤忠ケーブルシステム株式会社
2．株式会社エムアイセブンジャパン / 株式会社シンタックスジャパン /
　レゾネッツ・エアフォルク株式会社
3．オタリテック株式会社
4．株式会社オーディオテクニカ
5．有限会社グルーヴ
6．株式会社サンフォニックス
7．株式会社ジェネレックジャパン
8．株式会社静科
9．スチューダー・ジャパン―ブロードキャスト株式会社
10. 株式会社ズーム
11. ゼンハイザージャパン株式会社
12. ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン株式会社
13. タックシステム株式会社
14. 日本音響エンジニアリング株式会社
15. ヒビノインターサウンド株式会社
16. ミックスウェーブ株式会社
17. 株式会社メディア・インテグレーション
18. メモリーテック株式会社

JAPRS 技術セミナー
3D オーディオ Dolby Atmos 勉強会レポート

株式会社サウンドインスタジオ
浜田　純伸

去る 11 月 19 日、九段のグロービジョン九段スタジオ 301 スタジオにおいて、表記のセミナーが開催され、参加する機会を得たので、その様子をレポートする。

高田技術委員長

高田技術委員長の挨拶の後、グロービジョンの川島氏より、グロービジョンスタジオの沿革と、2015 年に九段に新規オープンしたグロービジョン九段スタジオの説明があった。外国映画やアニメ作品のアフレコ、ダビングを中心として作品を制作してきており、「サザエさん」や「ツインピークス」など、我々にもなじみの深い作品を数多く手掛けてこられた老舗スタジオである。

2015 年に九段に移転したことを機に、Dolby Atmos 対応のダビングルームを 3 箱作られており、現在までに映画・ミュージックビデオともに数本ずつ Dolby Atmos 作品を制作しているとの事であった。

グロービジョン（株）
川島誠一氏

続いてタックシステムの益子氏、ドルビージャパンの中山氏、さらにメディア・インテグレーションの前田氏より、グロービジョンスタジオのシステム、Dolby Atmos の概要および制作方法、さらに Dolby Atmos を制作するためのシステム構成についての説明があった。以下、セミナーでのお話を、筆者がわかる範囲でまとめてみた。

Dolby Atmos 制作には大きく分けて Cinema と Home があり、それぞれ必要とされるシステム、コントロールルームの設計が異なる。グロービジョンは Cinema と Home のそれぞれに対応したスタジオをもつ、日本で唯一のスタジオであるとのこと。

タックシステム（株）
益子友成氏

今回、勉強会が行われた３０１スタジオは、Cinema 対応のスタジオである。

しかし Cinema 対応といっても、大劇場を思わせる巨大なダビングステージというわけではなく、ちょっと小ぶりな、ミニシアターといった感じの大きさである。逆に言うと、我々音楽エンジニアにとってみれば、やりやすいサイズといえるかもしれない。

Dolby Atmos は天井に吊られたものも含めたサラウンドスピーカまで、フロントスピーカと同様のダイナミックレンジを必要とする（40Hz-16kHz までほぼフラット）ため、サラウンド用にベースマネージメントが施されている。これは Dolby Atmos が認めた規格で、従来の帯域制限されたサラウンド用にスピーカを設置してある劇場などは、サブウーファを導入してベースマネージメントを行うことで、最小限の改装で Dolby Atmos を導入することが可能となっている。

グロービジョン 301 スタジオのユニークなところは、サブウーファが天井に吊ってあることである。ちょっとびっくりするような設計だが、実際に音を聴いてみると、特に何の

違和感も感じることはなく、むしろ上方の音でも十分な低域を感じることが出来た。

Dolby Atmos は 7.1.2ch（LCR, サイドの LR, リアの LR と Lfe に加えて天井の LR）の ”Bed” と呼ばれるベーシックなサラウンドトラックの他に、”Object” と呼ばれる、あちこちに動き回ることのできるパン情報を持った個別のトラックを合わせて 128 トラック持つことができる（Bed に計 10ch 使うため、Object は最大 118ch）。これらのトラックの音を RMU（Rendering and Mastering Unit) と呼ばれるユニットに通すことによって、物理的なスピーカの出力（パンニング）やその他のメタデータを含めたトータルのデータを得るようになっているとのこと。これらのデータ（音声およびパン情報などのメタデータ）は、ADM BWAV と呼ばれる WAV（BWF）の一種としてファイル化でき、このファイルを ProTools（12.8 以降）に読み込むことによってパンデータを含むオーディオデータを得ることが出来るらしい。
（詳しくは http://www.avidblogs.com/ja/pt-hd-12-8-dolby-atmos/　を参照いただきたい）。

DOLBY JAPAN（株）
中山尚幸氏

これまでは、Dolby 社の認証を受けた、限られたスタジオ（現状ではグロービジョンを含め国内３社）でしか Dolby Atmos のミックスを行うことが出来なかったが、ProTools　Ver12.8 以降、”Dolby Atmos Production Suite”（Avid の HP で 33,000 円で買える）というソフトウェア群を導入することにより、RMU を導入しなくとも Dolby Atmos ミックスを行うことができるようになったという。

モニタースピーカに関しては、最低、平面状に 7.1ch（サラウンドはサイドとバックに 2ch ずつ）とサイドサラウンドの上に 2ch（つまり Bed ch 分）あれば、「なんちゃって Atmos」の制作が可能だということである（出来れば、サイド前方にもう 2ch と、その上方に 2ch はほしいところだが）。

これまで、Dolby Atmos に興味はあっても、なかなか実際の制作に踏み込めなかったスタジオでも、これまでに 5.1ch などのサラウンド制作の経験があるスタジオであれば、割と簡単に Dolby Atmos の実験程度はできるし、映画やビデオなど、最終的にダビング（MA）工程を経るものであれば、このシステムでも、音楽のミックスは十分出来るということであろう。

勿論、モニターボリュームの問題がある（最低でも 10ch のボリュームコントロールが必要）が、グロービジョンではスタジオイクイプメント社製のアナログシステムを使用しており、また、タックシステムでもオリジナルのデジタルコントロールモニターシステムが発売されているらしいので、それらを導入すれば、本格的なミックスも可能になるであろう (正式なマスター素材を得るには、Dolby 社の認証を受けたスタジオで、RMU を使用したマスタリング・レンダリングが必要とのこと)。

（株）メディア・
インテグレーション
前田洋介氏

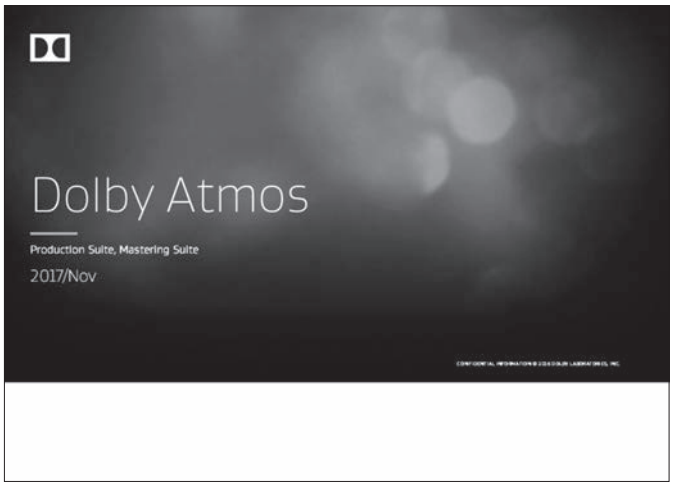
最後に、Dolby Atmos で制作された作品の試聴ができた。Dolby 社のトレーラーの他、日本におけるサラウンドミックスのトップランナーである、沢口真生氏、深田晃氏、そして高田英男技術委員長の作品などが流された。それぞれにアプローチは大きく異なるものの、どの作品もこれまでの平面的なサラウンドから、大きく拡がった立体感のあるサウンドを体感することが出来、非常に刺激を受けた試聴会であった。

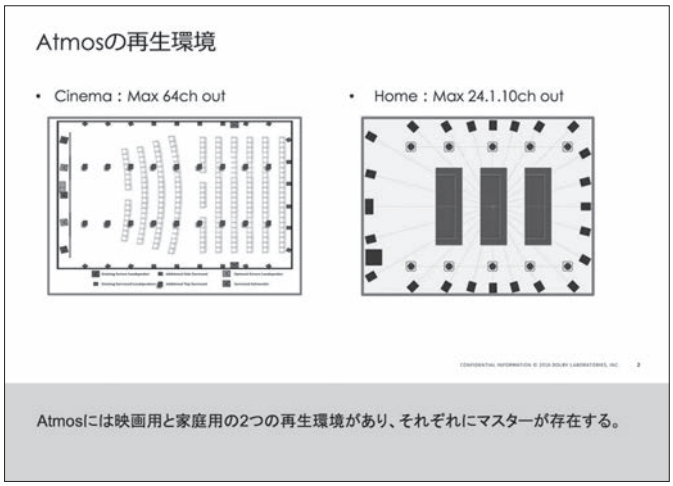
（株）dream window
深田晃氏

個人的にも Dolby Atmos には以前から興味があり、実際に実験的なミックスを行ったことはあったのだが、今回のセミナーでは、非常に実践的に、且つわかりやすく、Dolby Atmos 作品の制作について学ぶことが出来、大変有意義であったと思う。
ただ惜しむらくは、参加者に若手が少なかったことだろうか？まだ新しいフォーマットなだけに、次代を担う若い人たちの積極的な参加が少なかったのは、少し残念である。

最後に、このような有意義なセミナーを企画・開催していただいた JAPRS 技術委員会ならびに事務局の方々に感謝申し上げるとともに、セミナー会場をお貸しいただいたグロービジョンのスタッフの皆さん、とてもわかりやすく説明いただいた講師の方々、さらにはデモ音源を聴かせて頂いた先輩諸氏に心よりお礼申し上げたい。

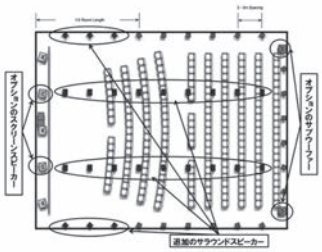
Dolby Atmos の概要説明資料（DOLBY JAPAN　株式会社　　中山 尚幸 氏）





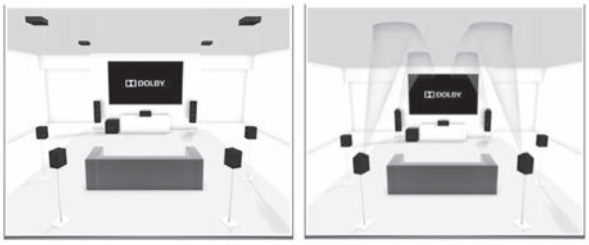
Dolby Atmos Cinema

- 5.1や7.1との互換性を確保し、効果的な位置にスピーカーを追加。
- 各々のスピーカーの再生能力強化。



映画用は、大空間でダイナミックレンジの広い再生環境が対象となるミックス。

Dolby Atmos Home



家庭用は、ニアフィールドで適切なダイナミックレンジが求められる再生環境のためのミックス。

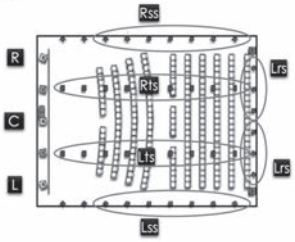
Dolby Atmosの仕組み

- チャンネルベース（7.1.2ch）とオブジェクトベース（118トラック）を同時再生。
- レンダリングエンジンが出力チャンネル=スピーカー数に合わせ出力。
- オブジェクト音声には3次元位置情報等のMetadataが付く。

映画用と家庭用ともに、Bed7.1.2chとObject118ch（最大）は同じ。Objectは音声と位置情報で構成され、DAWでは出力チャンネルを決めない。

Dolby Atmosのチャンネル

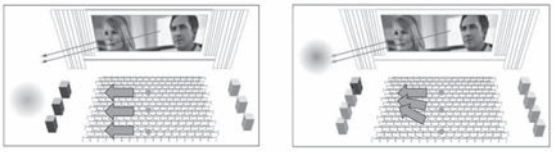
- 7.1.2（7.1ch+ Over Head 2ch）
- Bed (ベッド）と呼ぶ。



平面7.1chと天井2chをDolbyは7.1.2chと言う。9.1chでは平面のみ。

Dolby Atmosの特徴

- 複数駆動と個別駆動。
- 周波数特性はL/C/Rと同じ全帯域にすることで全方位同じ音色。

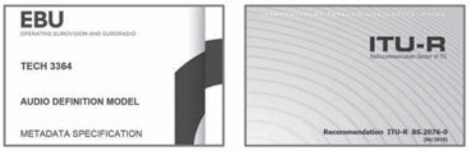


複数駆動　　個別駆動

Bedはスピーカーアレイで再生されるため左、Objectはスピーカー単位で定位させることが可能なため右。

オブジェクトベース

- 特定のチャンネル=スピーカーに属さないが、位置等の情報を持つ音声。
- オブジェクトの仕様は標準化されている。（ADM-BWAV）



Objectは世界標準へ。WAVファイルに記録されたBed+Objectは、ProTools12.8以降でセッションとしてインポート可能。パンニングデーターがオートメーショントラックに展開される。

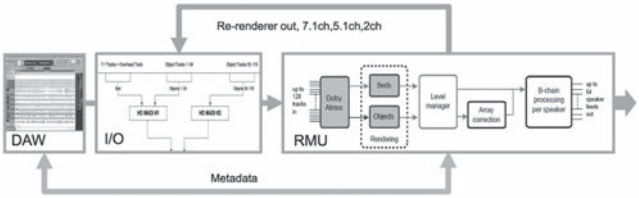
Dolby Atmos 音響制作

- ATMOS音声制作
  - ダビングステージまたはニアフィールドモニター（ATMOSスピーカー配置）
  - RMU（Rendering Mastering Unit）MADI I/O
  - Panner : Dolby Atmos Production Suite
    Pro Tools 12.8
    Steinberg Nuendo 8 + Nuendo RMU Connector for Dolby Atmos® software

Atmos音声制作に必要なツールがある。モニタースピーカーとRMUとパンナー。

Dolby Atmos

- ATMOS作成ツール。Rendering Mastering Unit（RMU）



RMUは外付け音響機器。ProToolsの音声出力（MADI）とAtmosパンナーからの位置情報（LAN）を受け取り、接続されているスピーカーレイアウトに合わせてレンダリングする。Atmosマスター制作時にはBed+Objectの録音も行う。

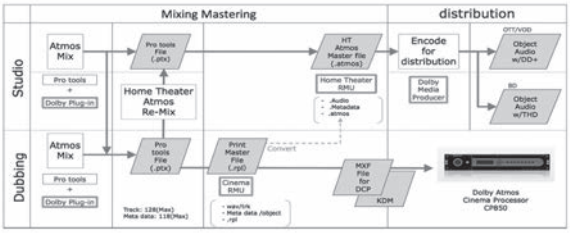
2つのRMUとDolby Atmos Master

- Cinema :
  - 映画館上映を目的としたマスター。
  - ダビングステージでファイナルミックスとマスタリング。
  - Dolby Atmos Print Masterと呼ばれるファイル群をRendering Mastering Unit (RMU)で作成。
- Home / VR :
  - 一般家庭での視聴を目的としたマスター。
  - ニアフィールドモニターでのAtmosスピーカーレイアウトでミックスとマスタリング。
  - Dolby Atmos Master File（.atmos）と呼ばれるファイル群をHome-Theater Rendering Mastering Unit (HT-RMU) で作成。
- 異なるポイントはRMUとスピーカーレイアウト及び部屋の容積。
  その他の制作用DAWやツールは共通。

映画用と家庭用で異なるAtmosマスターファイル。ただしProToolsのセッションに使用するツールは共通。

Dolby Atmos 制作

- 各ファイルの役割と互換性



映画用と家庭用のProToolsセッションは融通できるが、Atmosマスターは基本的に専用となる。

2つのDolby Atmos制作ツール

- Dolby Atmos Production Suite :
  - Atmosのミックスが可能。
  - Avid Storeで販売中。
- Dolby Atmos Mastering Suite :
  - AtmosのミックスとHome用マスタリングが可能。
  - 限定6ディーラーがHT-RMU用の推奨PCも販売。
    - RSPE - LA
    - AID - LA
    - Westlake Pro - LA
    - Dale Pro Audio - NYC
    - HHB Communications - London
    - ACE - Hong Kong and Beijing

家庭用Atmosのミックスとマスタリングまたは映画用の仕込みのためのツールは販売されている。

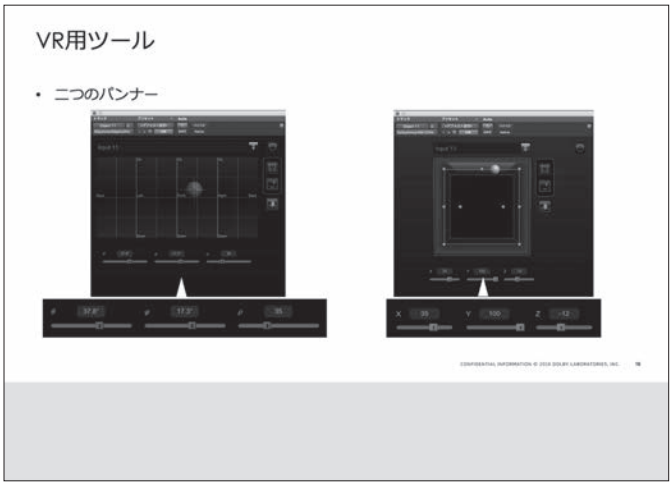
Dolby Atmos用ツール

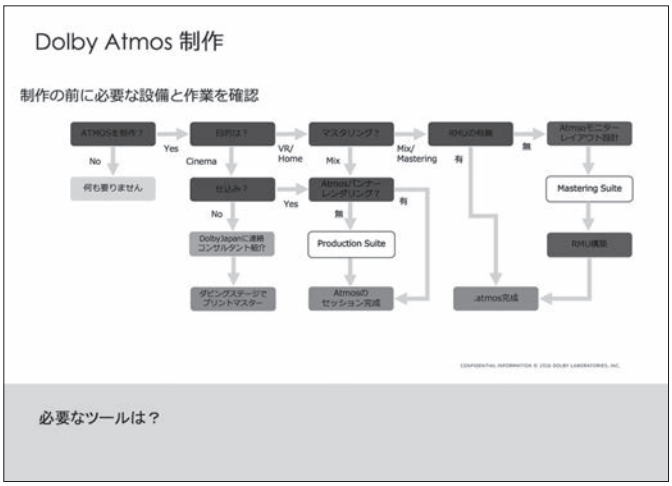
- パンナーとモニターコントロール

Dolby Atmos Panner Plug-Ins

ProTools12.8標準

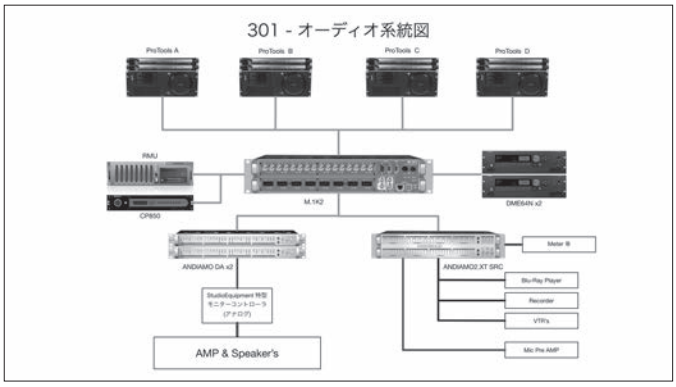
Dolby Atmos Monitor

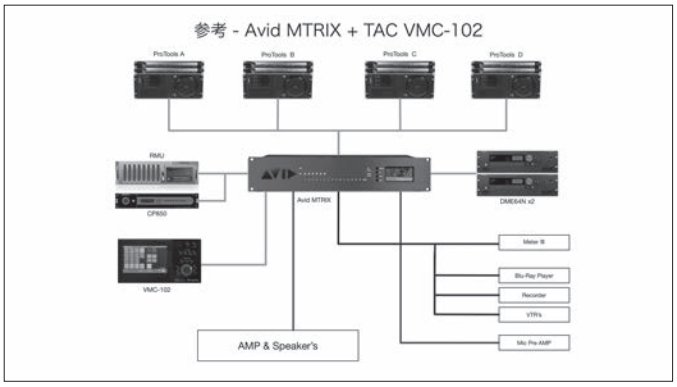


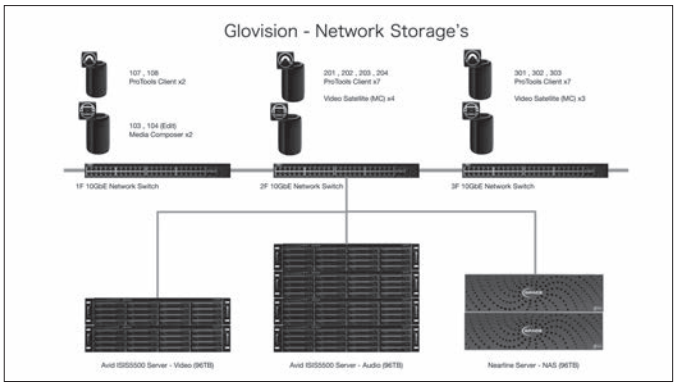


グロービジョン九段スタジオ 301 のシステム説明資料

（タックシステム株式会社　益子 友成 氏）







Dolby Atmos

実際に作る手段

悩み…

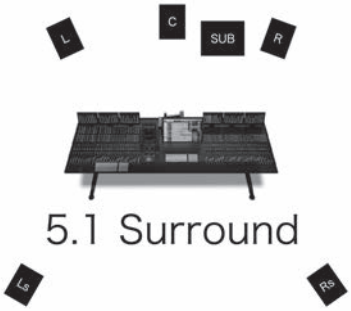
- 既存スタジオへAtmosに対応させる為には、サラウンドスピーカーの設置が必要
- バイノーラルやダウンミックスでの完全編集は難しい
- けど…Atmosコンテンツの制作はしたい！

対応させる意味は？

- OTT配信コンテンツ制作の仕事が爆発的に増えている
- まだ日本で数件しか無いAtmos編集作業環境を早期に構築しイニシアチブを取る
- Dolby Atmosでミキシングすれば、シネマやVRといった多種のイマーシブオーディオに対応可能
- 結果的にマネタイズする戦略が取れる

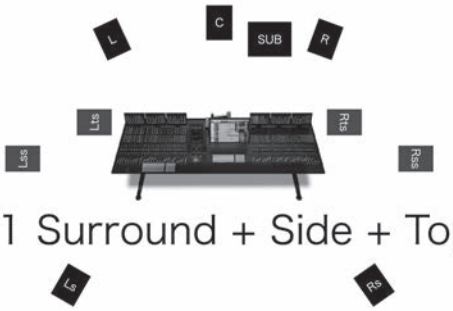
Dolby Atmos

できることから試してみよう!!

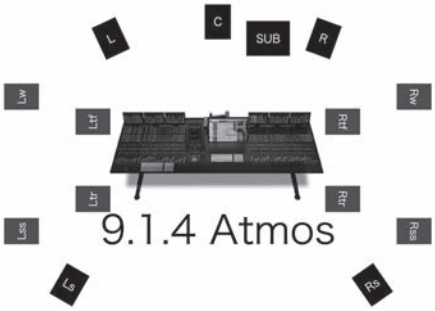


5.1 Surround

5.1 Surround + Side



5.1 Surround + Side + Top

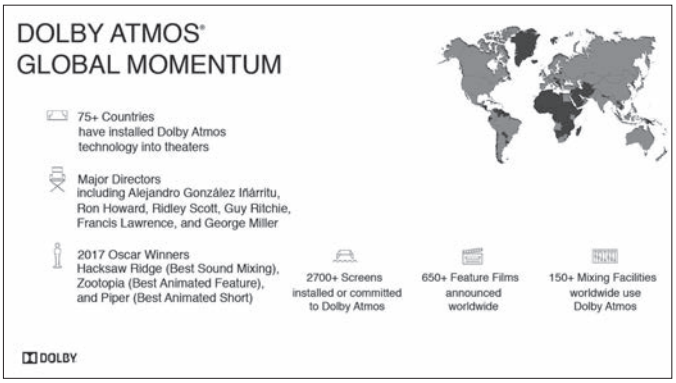


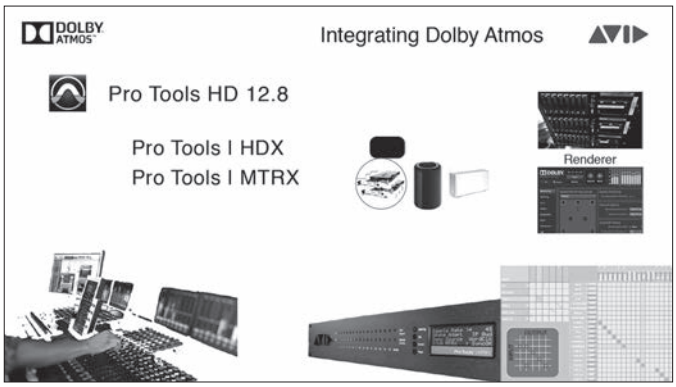
9.1.4 Atmos

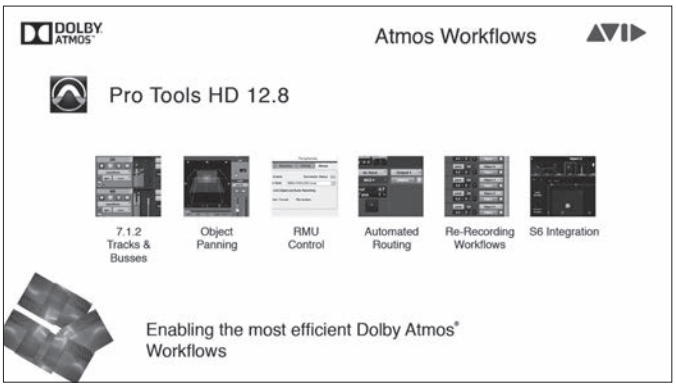
Dolby Atmos Mastering Suite with RMU/J

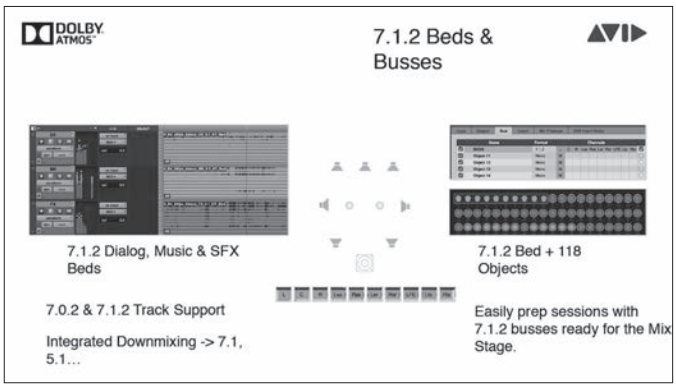
- Dolby社推奨 DELL Workstation (2U)
- Dolby Atmos Mastering Suite同梱
- Dolby Atmos HT-Rendering and Mastering Software インストール済
- MADI 2系統 IO , LTC IO カード実装済
- 二重化電源, 内蔵ディスクは全てSSD
- ハードウェア製品保証5年間、年間オンサイト保守プログラムをご用意(有料)

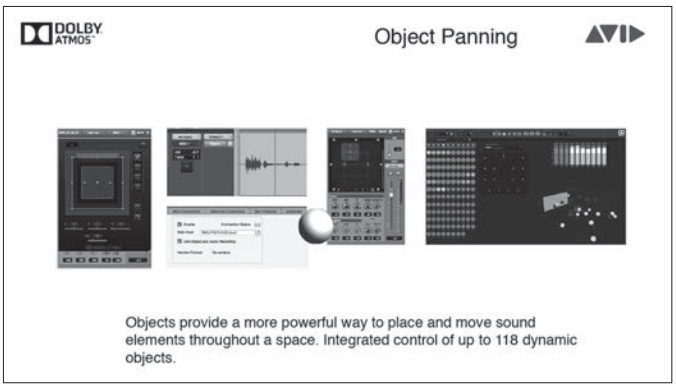
Pro Tools Ver12.8 による Dolby Atmos 制作に関する説明資料
（株式会社メディア・インテグレーション　前田 洋介 氏）

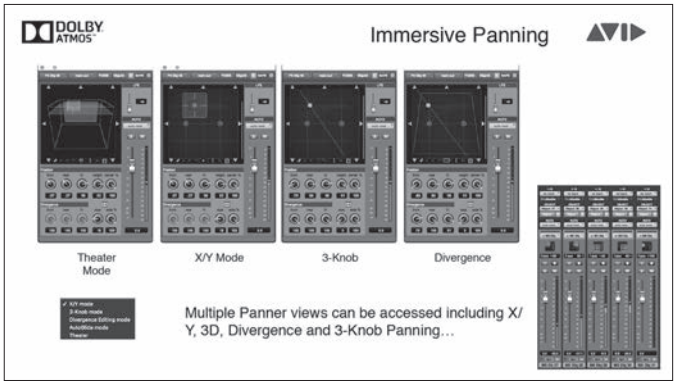


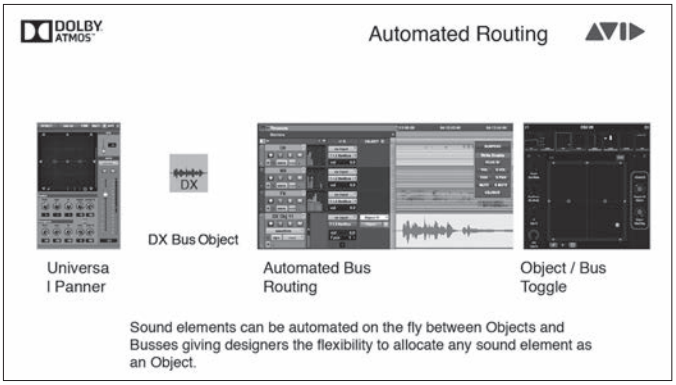




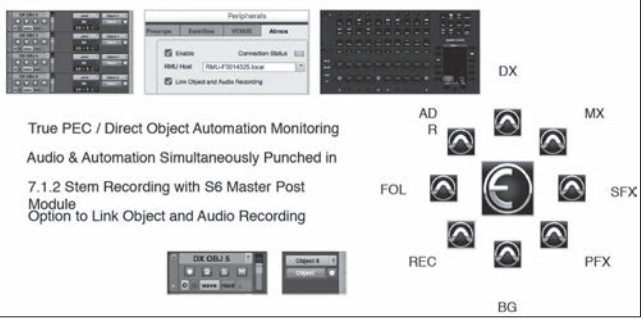








Re-Recording

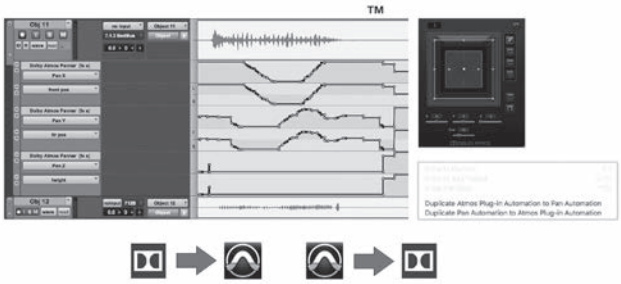


True PEC / Direct Object Automation Monitoring

Audio & Automation Simultaneously Punched in

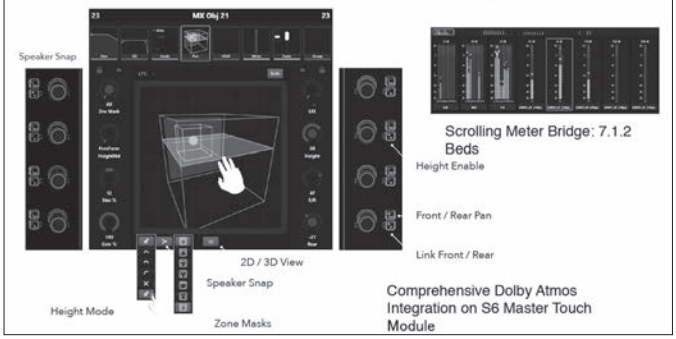
7.1.2 Stem Recording with S6 Master Post Module
Option to Link Object and Audio Recording

TedTranslate



One-Click Translation between Dolby Atmos Panner Plug-In automation and Pro Tools native panning automation.

S6 Atmos Integration



Comprehensive Dolby Atmos Integration on S6 Master Touch Module

Audio Definition Model

ADM File Multichannel Import into Pro Tools - ITU BWAV

Import Track Names, Groups, Object/Bus & Pan Data

Open Standard: Metadata to fully describe the audio assets

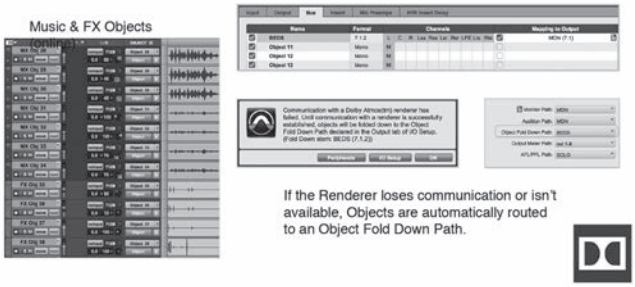
Atmos Production Suite

Software-based Dolby Atmos rendering and monitoring tools that don't require additional hardware.

Provides Editorial and Premix functionality for Film and TV content along with a complete end-to-end workflow for VR.
Includes Renderer, Monitor, Panner, Send & Return Plug-Ins, VR Transcoder.

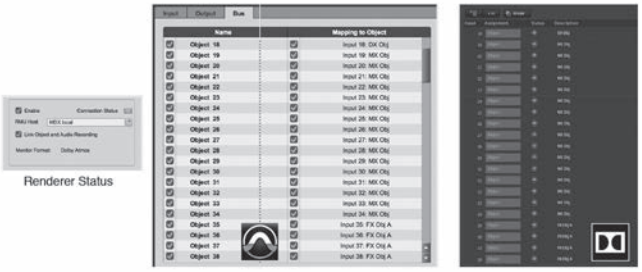
Downmixing

Music & FX Objects



If the Renderer loses communication or isn't available, Objects are automatically routed to an Object Fold Down Path.

Object Metadata

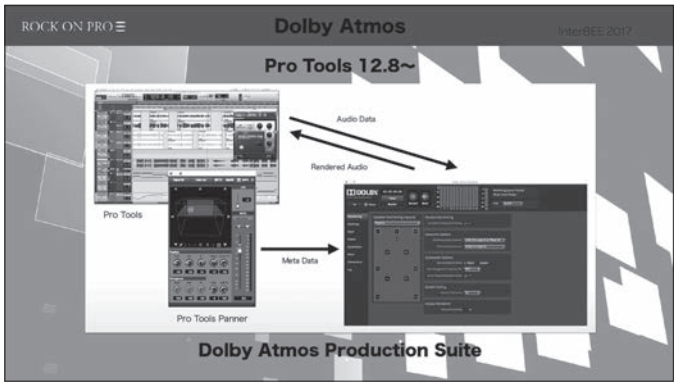


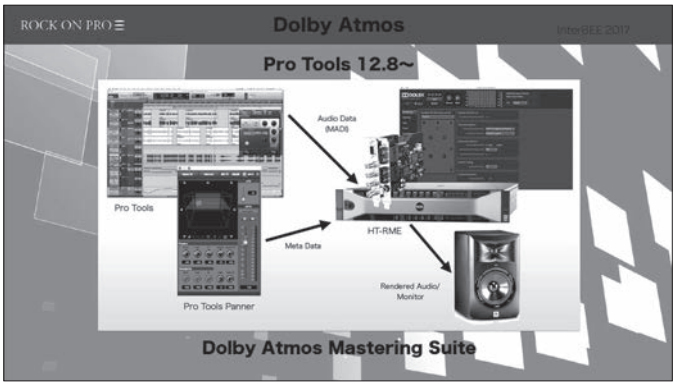
Renderer Status

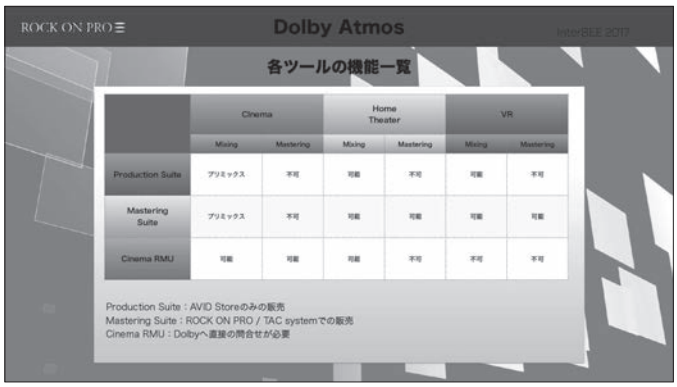
Integrated communication with the Dolby Renderer for Object Metadata

Atmos AAX Processing

Supporting 7.1.2 busses, Avid & 3rd Party Plug-ins perform signal processing for immersive environments.







	Cinema		Home Theater		VR	
	Mixing	Mastering	Mixing	Mastering	Mixing	Mastering
Production Suite	プリミックス	不可	可能	不可	可能	不可
Mastering Suite	プリミックス	不可	可能	可能	可能	可能
Cinema RMU	可能	可能	可能	不可	不可	不可

NAB 2017 で発表された Pro Tools 12.8 での機能追加に関する資料となります。
図版だけでは分かりにくい部分もあるかと思いますが、Production Suite は Dolby 本国 WebSite より 30 日のデモライセンスの取得が可能です。
Pro Tools 12.8 とともに是非とも実際にお試しいただければと思います。

JAPRS 技術セミナー
ステレオ＆サラウンドマイキング勉強会レポート

日本音楽スタジオ協会　技術委員長
高田　英男

主旨

録音スタジオをメインに使用し録音しているエンジニアにおいては、マルチマイキングによる録音業務が多く、ワンポイント的なマイキングによる録音が少ない現状である。最近はホールやライブハウスなどで録音する機会も増えており、今回、基本的なステレオマイキングによる録音及び、ハイトチャンネルに対応したサラウンドマイキング録音について、基本的な勉強会を行いエンジニアの技術向上に繋がるセミナーを実施した。

日時：平成 29 年 12 月 2 日（土）
13：00 ～ 16：30（受付 12：45 ～）

場所：東京藝術大学　千住キャンパス・新館 3 F Studio A
東京都足立区千住 1 -25- 1

内容：

⑴ 代表的ステレオマイキング・サラウンドマイキングについての講義

深田晃氏

① ステレオマイキング
AB 方式、XY 方式、ORTF 方式、Decca Tree 方式、MS 方式

② サラウンドマイキング
Decca Tree +Omni Square（Front Microphone + Ambience Array）
Fukada Tree 方式、ハイトチャンネルマイキング

講師：株式会社 dream window　代表 深田 晃 氏

⑵ ストリングスカルテットによる生演奏を各マイキング方式により録音～再生。
演奏：第１バイオリン：小西 もも子　　ビオラ：福田 紗瑛
第２バイオリン：早淵 綾香　　チェロ：下斗米 恒介
（東京藝術大学　大学院音楽研究科　室内楽専攻）
演奏曲目「ベートーヴェン弦楽四重奏曲第 10 番 Op.74」
講師：株式会社 dream window　代表 深田 晃 氏
協力：東京藝術大学 音楽学部 音楽環境創造科 亀川 徹 教授

①各ステレオマイキングによる録音
＊マイク設置位置を出来るだけ同条件にする。
AB 方式、MS 方式、XY 方式、ORTF 方式、Decca Tree 方式

②サラウンドマイキングによる録音
Fukada-Tree 方式　5CH、9CH
＊9CH 再生のみ、22.2CH 試聴室にて行う

録音フォーマット
PCM96kHz/24bit　　Pro Tools
備考
録音した各音源は教材＆勉強目的でスタジオ協会加盟　専門学校・スタジオなどにコピーし、試用範囲を確認した上で配布可能とした。

各マイキングによる音質的特徴　（高田個人的な感想）

高田技術委員長

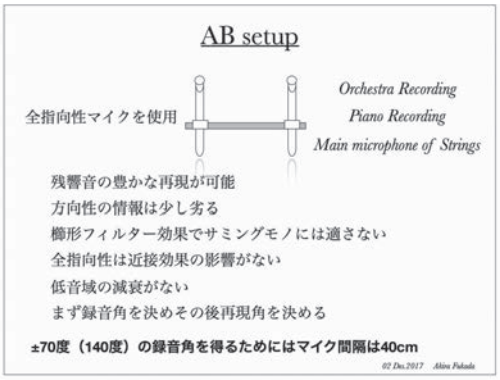
＊講師　深田　晃氏制作によるマイキング基礎知識を参照

Ⅰ．ステレオマイキング

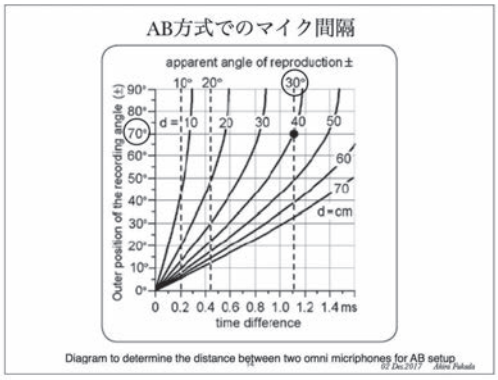
1. AB 方式（深田氏　資料１、２参照）、

・このマイキング方式での録音が多い為か、自然な音質感でありスタジオの中で 演奏している弦楽四重奏の生音に近い音色感。

・楽器の定位も明確であり演奏者とマイクとの距離と高さにより、定位感や解像力が大きく変化する。



資料１



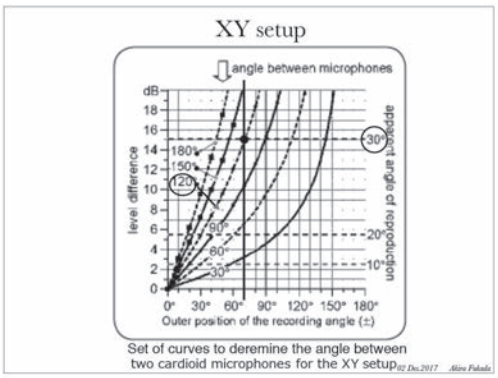
資料２

2. XY 方式（深田氏　資料３、４参照）

・定位感は素晴らしいが音色的に少し低域が痩せた感じ。

・弦楽四重奏ではビオラ・チェロなどが細く感じたが、アコースティックギターなどの録音には効果的な感じ。

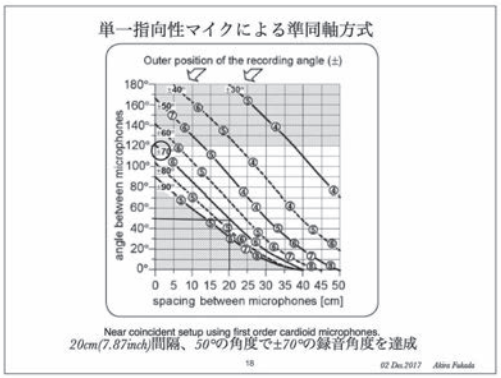
資料３



資料４

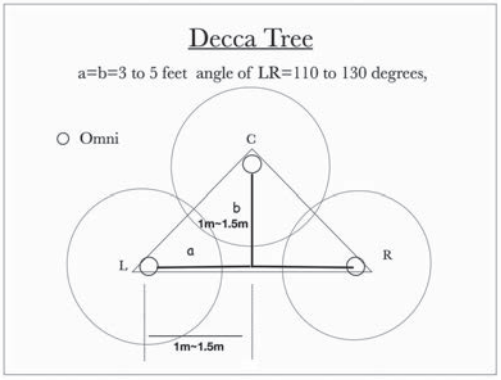
3. ORTF 方式（深田氏　資料５、６参照）
・定位感が素晴らしく、音色的にも自然な感じ。
・AB 方式と比較すると音色感はクリアーだが、少し低域が細くなる感じ。

資料５



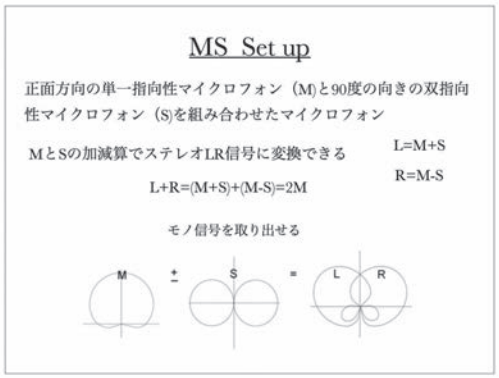
資料６

4. Decca Tree 方式（深田氏　資料７参照）
・低域の量感があり力強いサウンド感。
・音場定位が広く、少し広がり過ぎる感じもあった。
・DPA4006 での録音であるが、推奨マイクのノイマン M50 での音色も聴いてみたい。

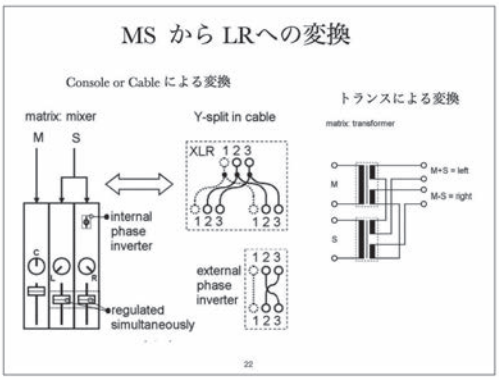


資料７

5. MS 方式（深田氏　資料８、９参照）
・自然な定位感。
・音色は素直であるが音の情報量が少し少ない感じ。
・モノラル再生にて、一番素直でステレオ～モノ変換時の独特の濁りが無い。



資料８



資料９

Ⅱ．サラウンドマイキング

1. Fukada Tree 方式　5CH 再生（深田氏資料 10 参照）

・スタジオの中で演奏している弦楽四重奏が、一番素直で心地良い音色であり、音場空間も大変素直に聴こえた。

・ステレオマイキングとサラウンドマイキングの違いが大きいと思うが、自然な響きで、音楽の魅力がより伝わるサラウンドサウンドに感動した。

資料 10

2．サラウンドマイキング＋ハイトチャンネル　9CH 再生

亀川徹氏

・22.2CH 試聴室にて再生

・フロントとリアの中間定位の音源によりサラウンドの繋がり間は自然。

・ハイトチャンネル効果については、参加したエンジニアの皆様に体感して頂く為 に、各エンジニアにレベルを調整して頂き再生した。

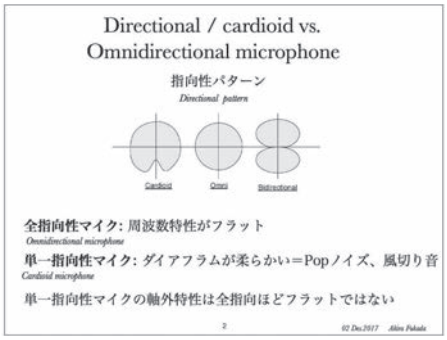
・ハイトマイキングによる効果（没入感）は体感出来たが、実際にはより繊細なサラウンドのバランス感覚が必要と感じた。

纏め

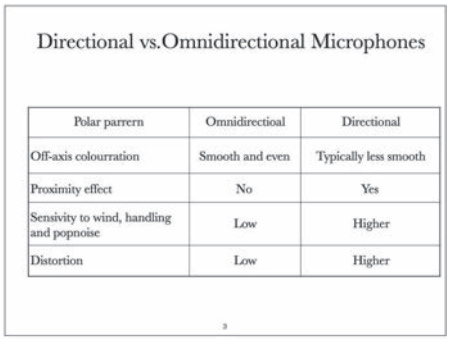
弦楽四重奏の録音において各ステレオマイキングを限りなく同条件にてセッティングし、それぞれのマイキングによる音質的特徴（定位感・音色・音場）などを比較確認出来た事は、エンジニアにとっては大変有意義であり、更に、マイキングによる音質変化の確認と共に、演奏者とマイクとの距離・高さなど単一指向性マイクと無指向性マイクを効果的に使用する技術など、現場に直結したノウハウを学べた事は大変勉強になりました。

デジタル技術による録音制作が進む中、アナログ技術（マイキングによる音質変化）を学ぶことは、エンジニアスキルにとって大変重要な事であり、今回アコースティック録音及び、サラウンド録音制作に精通されている深田晃さんによる講義～生録音セミナー、感謝申し上げますと共に、東京藝術大学の千住キャンパスでのスタジオ録音・ハイトチャンネル録音再生・弦楽四重奏の演奏者協力など、セミナー全体をサポートして頂きました東京藝術大学、亀川徹教授に心より感謝申し上げます。

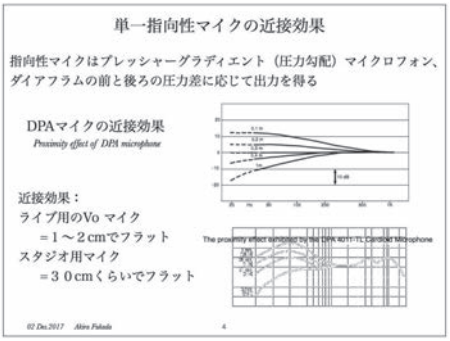
資料 11



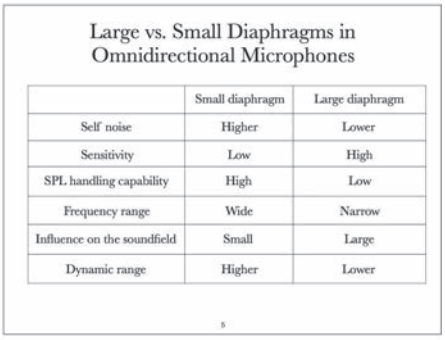
資料 12



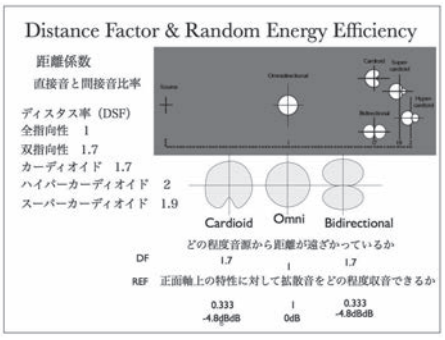
資料 13



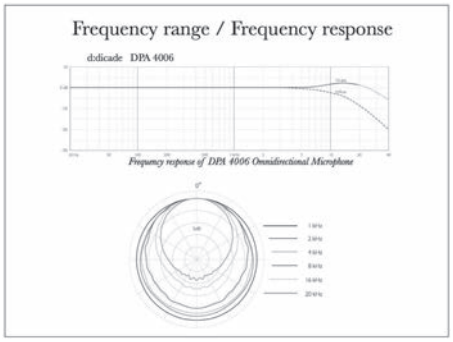
資料 14



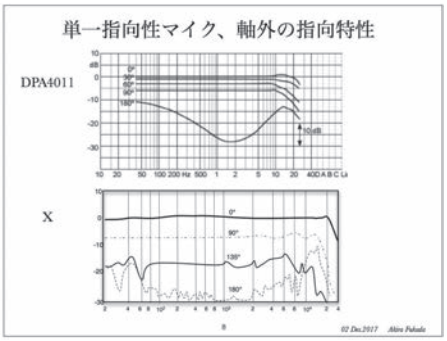
資料 15



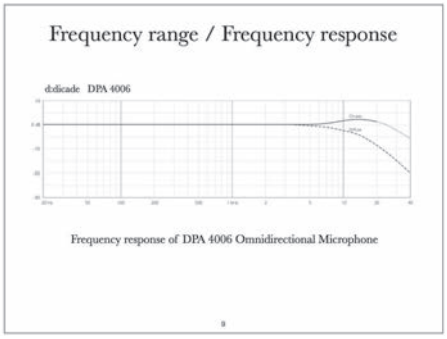
資料 16



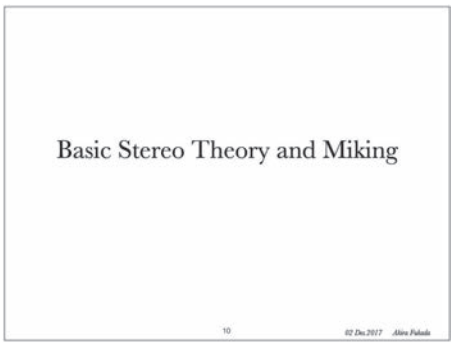
資料 17



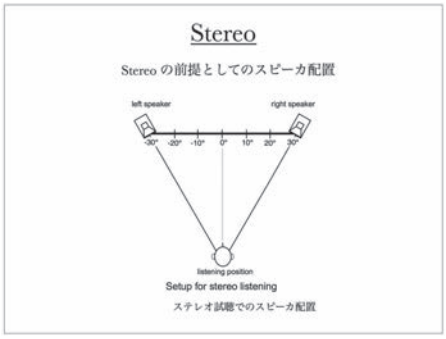
資料 18



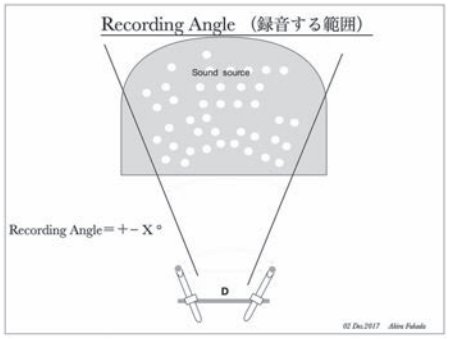
資料 19



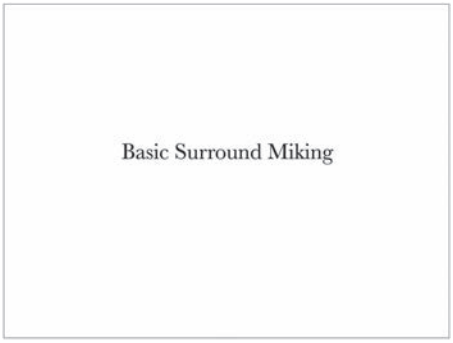
資料 20



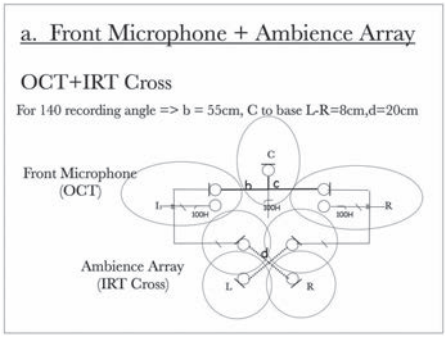
資料 21



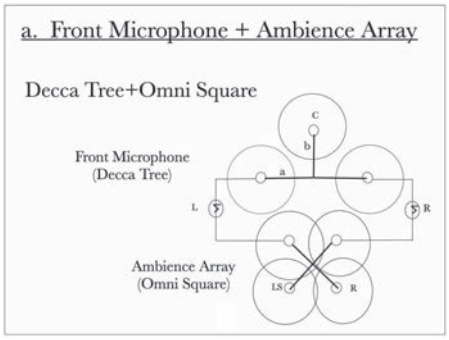
資料 22



資料 23

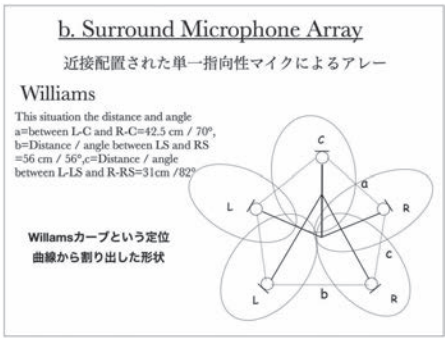


資料 24

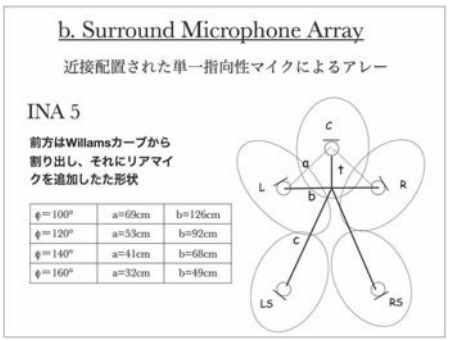


資料 25

資料 26

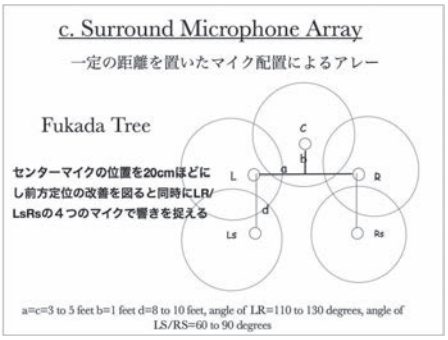


資料 27

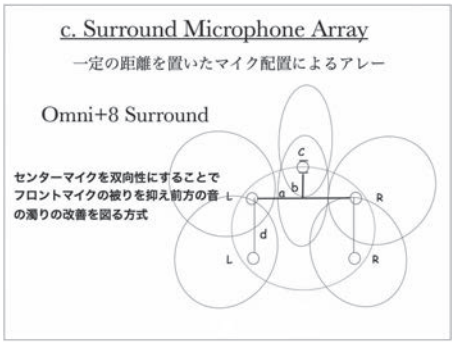


資料 28

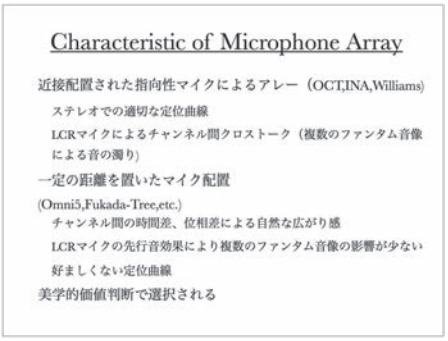
資料 29



資料 30



資料 31



資料 32

Studio A コントロールルーム

Studio A

Studio A

Studio A

Studio B

第 24 回日本プロ音楽録音賞授賞式 レポート

「日本プロ音楽録音賞」は、平成５年に当協会が制定した「JAPRS 録音賞」を出発点とし、音楽制作、録音に対する認識を高め、音楽産業の更なる質の向上、録音技術者の地位の確立などを目的として、平成６年より実施されているものです。

今回第 24 回目の実施にあたり、一般社団法人日本音楽スタジオ協会および一般社団法人日本オーディオ協会、日本ミキサー協会、一般社団法人日本レコード協会、一般社団法人演奏家権利処理合同機構 MPN の５団体が主催し、経済産業省の後援および日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、株式会社ステレオサウンドの協賛、サウンド＆レコーディング・マガジン、ＣＤジャーナル、ステレオサウンド、プロサウンド、レコード芸術の賛助、並びに NPO 法人ミュージックソムリエ協会、（株）レーベルゲート /mora、オンキヨー＆パイオニアイノベーションズ（株）/e-onkyo music、（株）ソニー・ミュージックコミュニケーションズ、（株）サウンドインスタジオ、（株）ジェネレックジャパン、（株）ミキサーズラボ / ワーナーミュージック・マスタリング、ミックスウェーブ（株）、オタリテック（株）、東放学園音響専門学校の協力により「第 24 回日本プロ音楽録音賞」を実施し、平成 29 年 12 月６日（水）、ホテル雅叙園東京４Ｆ「孔雀」に於いて授賞式、４Ｆ「飛鳥」に於いてパーティーが開催され、受賞作品および受賞者の発表が行われました。

内沼運営委員長

今回の授賞式も「音の日」のイベントとして開催され、はじめに内沼名誉会長が運営委員長として開会の辞を述べられ、６部門計 14 作品およびベストパフォーマー賞並びにニュー・プロミネントマスター賞について表彰が行われました。

応募作品の分類については以下の通りとし、審査は以下の６部門およびベストパフォーマー賞、ニュー・プロミネントマスター賞を対象に行われ、全 118 作品の応募からＣＤ部門「クラシック、ジャズ、フュージョン」：２作品、ＣＤ部門「ポップス、歌謡曲」：４作品、ハイレゾリューション部門「2ch ステレオ」：３作品、ハイレゾリューション部門「マルチ ch サラウンド」：１作品、放送部門「2ch ステレオ」：２作品、放送部門「マルチ ch サラウンド」：２作品がそれぞれ優秀作品としてノミネートされ、その中から各部門１作品が最優秀作品として選定され、更にベストパフォーマー賞１作品、ニュー・プロミネントマスター賞２作品が選ばれました。

CD 部門　クラシック、ジャズ、フュージョン / 応募総数：25 作品
CD 部門　ポップス、歌謡曲 / 応募総数：26 作品
ハイレゾリューション部門　２ch ステレオ　ジャンルを問わず / 応募総数：32 作品
（SACD、DVD、BD& ノンパッケージ作品）
ハイレゾリューション部門　マルチ ch サラウンド　ジャンルを問わず / 応募総数：７作品
（SACD、DVD、BD& ノンパッケージ作品）
放送部門　2ch ステレオ / 応募総数：13 作品
（ラジオ番組：ＡＭ、ＦＭ、衛星放送）（有線放送）
（テレビ番組：地上波、衛星放送）
放送部門　マルチ ch サラウンド / 応募総数：15 作品
（テレビ番組：地上波、衛星放送）
ベストパフォーマー賞
ニュー・プロミネントマスター賞

今回は、各部門の最優秀作品、優秀作品およびベストパフォーマー賞、ニュー・プロミネントマスター賞を紹介するとともに、最優秀作品として表彰された代表エンジニアの方々およびベストパフォーマー賞の編曲者、ニュー・プロミネントマスター賞の代表エンジニアに依頼し、受賞の感想、作品のコンセプトについてコメントをいただきましたので、35 頁以降に掲載させていただきます。

第24回日本プロ音楽録音賞
授賞式次第

1、主催者代表挨拶

第24回日本プロ音楽録音賞　運営委員長
一般社団法人日本音楽スタジオ協会　名誉会長　内沼　映二

2、最優秀作品・優秀作品の発表及び表彰並びに審査員講評

ＣＤ部門　クラシック、ジャズ、フュージョン
一般社団法人日本オーディオ協会　会長　校條　亮治
一般社団法人日本音楽スタジオ協会　会長　高田　英男

ＣＤ部門　ポップス、歌謡曲
一般社団法人日本レコード協会　理事　畑　陽一郎
日本ミキサー協会　副理事長　森元　浩二

ハイレゾリューション部門　2ch ステレオ
一般社団法人日本音楽スタジオ協会　名誉会長　内沼　映二
一般社団法人日本音楽スタジオ協会　会長　高田　英男

ハイレゾリューション部門　マルチ ch サラウンド
日本ミキサー協会　副理事長　森元　浩二
一般社団法人日本音楽スタジオ協会　監事　清水　三義

放送部門　2ch ステレオ
日本放送協会 放送技術局 制作技術センター　専任局長　服部　康夫

放送部門　マルチ ch サラウンド
日本放送協会 放送技術局 制作技術センター　専任局長　服部　康夫
音響ジャーナリスト
株式会社マクス　代表取締役　加藤　茂樹

3、ベストパフォーマー賞の発表及び表彰並びに審査員講評

一般社団法人演奏家権利処理合同機構ＭＰＮ　副理事長　松武　秀樹
理事長　椎名　和夫

4、ニュー・プロミネントマスター賞の発表及び表彰並びに審査員講評

一般社団法人日本音楽スタジオ協会　名誉会長　内沼　映二

5、受賞者代表挨拶

放送部門　2ch ステレオ　最優秀賞
ミキシング・エンジニア
日本放送協会　野口　康史

以上

ＣＤ部門 「クラシック、ジャズ、フュージョン」
（写真は☆印の代表エンジニア）

［最優秀賞］
■作品「Timeless 20th Century Japanese Popular Songs Collection」（SICX-89）より
「あまく危険な香り」　　ケイコ・リー　CD
発売元：株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント

☆ミキシング＆マスタリング・エンジニア：
鈴木　浩二
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）

〈受賞のことば〉
ジャズヴォーカリストとして国内外で人気を確立しているケイコ・リーの待望の邦楽カヴァーアルバムです。
このアルバムでは、「ワインレッドの心」、「ルビーの指環」など、誰もが知る20世紀のエヴァーグリーンなＪポップの数々を上質なジャズ・センスでしなやかに歌い上げる、大人が落ち着いて聴ける作品になっています。
受賞した曲「あまく危険な香り」はミディアム・スローで、とてもシンプルなアレンジです。
ドラム、ベース、キーボードを中心にグルーヴ感、リズム感を大切にし、その前方にしなやかで妖艶なヴォーカルを強調したミックスにしました。楽器等すべてのレコーディングを米山が担当し、Pro Tools 96kHz32bit に収めました。ミックスは、アナログコンソールにすべて立ち上げ、ニーヴサウンドを楽しみながら私がミックスをしました。ジャズのテイストを生かし、日本語をしっかり聴かせるサウンドに仕上がったと思います。
この度このような賞を頂き、大変光栄に思うとともに、この作品に関わられた多くの方々に深く感謝申し上げます。これを励みにまた精進してまいりたいと思います。

○レコーディング・エンジニア：米山　雄大
（株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ）

［優秀賞］
●作品「ゼルダの伝説 30周年記念コンサート」（COZX-1293-4）より
「神々のトライフォース２＆３銃士メドレー」
東京フィルハーモニー交響楽団　指揮：竹本泰蔵　CD
発売元：日本コロムビア株式会社

☆マスタリング・エンジニア：山下　由美子　（日本コロムビア株式会社）
○ミキシング・エンジニア：塩澤　利安　（日本コロムビア株式会社）
○セカンド・エンジニア：川上　真一　（日本コロムビア株式会社）

ＣＤ部門　「ポップス、歌謡曲」
（写真は☆印の代表エンジニア）

［最優秀賞］
■作品「PLAY」（VIZL-1149）より「sakura」藤原 さくら　CD
発売元：株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント

☆マスタリング・エンジニア：内田　孝弘
（株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント）

〈受賞のことば〉
この度は、最優秀賞に選定いただきまして誠にありがとうございます。
藤原さんをはじめ録音に参加されたミュージシャン、ディレクターの磯さん、エンジニアの渡辺さん、そして受賞作品「sakura」にかかわった全てのスタッフに心からお礼いたします。ありがとうございました。
「sakura」に関してのマスタリングオーダーはナチュナルな仕上がりの 96kHz 32bit のミックスマスターにバランス / レンジ感等、限りなく近いニュアンスで 44.1kHz 16bit に落とし込んで欲しいということでした。
実際のマスタリング作業ではミックスマスターを注意深く聞き、A/D コンバーターやケーブルの選択 / EQ 等の機材で似せていきました。
他のアルバムの曲に並ぶように、マスタリングリミッターで音量感は稼ぎましたが圧縮感が出ないように特に気を配りました。
受賞式では各受賞作品を聴くことができ、改めてプロ録音賞のレベルの高さを感じました。これを励みに今後とも良い作品に関われるよう努力していきたいです。

○ミキシング・エンジニア：渡辺　佳志
（株式会社 JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント）

［優秀賞］
●作品「がらくた」（VIZL-1700）より「ほととぎす [杜鵑草]」
桑田　佳祐　CD
発売元：株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント

☆ミキシング・エンジニア：中山　佳敬
（株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント）
○マスタリング・エンジニア：袴田　剛史
（株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント）
○アシスタント・エンジニア：宮沢　竣介
（株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント）

●作品「Mist-ic」（KICS-3467）より「BELIEVING」
塩ノ谷　早耶香　CD
発売元：キングレコード株式会社

☆マスタリング・エンジニア：矢内　康公
（株式会社キング関口台スタジオ）
○ミキシング・エンジニア：澁澤　俊介
（株式会社サウンド・シティ（マネジメント））

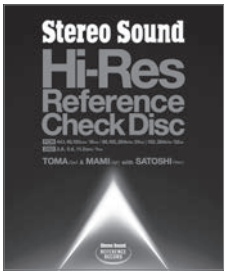
●作品「CHEER UP! THE SUMMER」（WPCL-12426）
山下 達郎　CD
発売元：株式会社ワーナーミュージック・ジャパン

☆マスタリング・エンジニア：菊地　功
（株式会社ミキサーズラボ ワーナーミュージック・マスタリング）
○ミキシング・エンジニア：中村　辰也
（株式会社プラネット・キングダム）

ハイレゾリューション部門 「2ch ステレオ」
（写真は☆印の代表エンジニア）

［最優秀賞］
■作品「Stereo Sound Hi-Res Reference Check Disc」（SSRR9-10）より
「Greensleeves」TOMA & MAMI with SATOSHI　フォーマット：384kHz/32bit
発売元：株式会社ステレオサウンド　BD-ROM

☆ミキシング・エンジニア：　高田　英男
（株式会社ミキサーズラボ）



〈受賞のことば〉
　ハイレゾフォーマットでの録音制作が進む中、デジタルフォーマット（PCM 録音・DSD 録音）及びスペック（サンプリング周波数・ビットレンジ）の変化によって、音質はどの様な特徴になるのか、更に物理的特性の「見える化」に挑戦した音源制作である。5 台の DAW（Pro Tools 2 台、Pyramix+Hapi を 3 台）をパラレルにセットし、2ch ダイレクト録音による編集・マスタリング無しの音源をそのままファイル化した。各フォーマットおよびスペックの違いによる音質変化の判断は、音質変化によって音楽がどの様に伝わるか（感性）による判断となる為に、音楽の力が重要である。TOMA & MAMI with SATOSHI（サックス、ピアノ、パーカッション）究極のアコースティックトリオによる優しく心がほっとする音楽を、如何にリスナーに伝えられるかを音創りのポイントとし録音を進めた。受賞した楽曲（Greensleeves）は PCM44.1kHz/16bit・PCM192kHz/24bit・PCM384kHz/32bit、DSD5.6MHz/1bit・DSD11.2MHz/1bit に設定した DAW にコンソール出力を同条件にて録音。今回その中で音のリアル感･透明感･高解像力・繊細感・音場空間の拡がりなど一番伝わると感じた PCM384kHz/32bit の音源

を提出した。Stereo Sound Hi-Res Reference Check Discを制作し感じた事は、PCM384/32bit,DSD11.2MHz/1bit などのダイレクト 2ch 録音による音の世界は新たなデジタルの音世界（スーパーハイレゾ）であり、音の鮮度及び解像力が秀逸である。又、サンプリング周波数の拡張により歪と解放感が改善、ビットレンジ（分解能）の深さにより低域が安定し素直な音色感となり、その相乗効果によりハイレゾ録音ならではの魅力が創られると感じた次第である。

最後になりましたが企画制作して頂きました（株）ステレオサウンド、（株）ミキサーズラボ、録音でお世話になりましたビクタースタジオに心より感謝を申し上げます。

○テクニカル・エンジニア：山口　雄
（株式会社ミキサーズラボ ワーナーミュージック・マスタリング）
○アシスタント・エンジニア：加藤　拓也
（株式会社ミキサーズラボ ワーナーミュージック・マスタリング）

［優秀賞］

●作品「PINK」より「PINK」
土岐 麻子　フォーマット：96kHz/32bit
発売元：エイベックス・ミュージック・クリエイティヴ株式会社
配信元：mora

☆ミキシング・エンジニア：米田　聖　（studio MSR）
○マスタリング・エンジニア：小柳　令奈　（form THE MASTER）

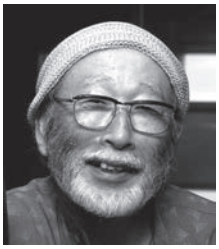
●作品「SHAKE」より「Purple Rain featuring SUGIZO」
TOKU　フォーマット：96kHz/24bit
発売元：株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ
配信元：mora

☆レコーディング＆ミキシング・エンジニア：カジャンチ　ニラジ
（NK SOUND TOKYO）
○マスタリング・エンジニア：木村　健太郎（KIMKEN STUDIO）

ハイレゾリューション部門　「マルチ ch サラウンド」
（写真は☆印の代表エンジニア）

［最優秀賞］

■作品「『Contigo en La Distancia』～遠く離れていても～」より
「Contigo en La Distancia 遠く離れていても」
喜多直毅 x 田中信正
フォーマット：192kHz/24bit 5.0ch
発売元：株式会社エムアイセブンジャパン
配信元：e-onkyo music



☆ミキシング＆マスタリング・エンジニア：沢口　真生　　（有限会社沢口音楽工房）
〈受賞のことば〉
本作は、Premium Records から 6 月にリリースしたアルバムで、通常のステレオ 2CH・MQA-CD・5CH サラウンドと 9CH マスターからバイノーラル・レンダリングを行った HPL-9 という様々な再生環境に応じたフォーマットでリリースしたアルバムです。ガット弦のバイオリンと APF という DUO の編成をホール録音で、サラウンドに仕上げるためのデザインをまず検討し、実際のステージングやマイキングを固めました。ガット弦のバイオリンは、大変微妙なレベルの演奏で、一方の Apf はホールを鳴らしきる音量があります。リハーサルを聞いて「湖面に揺らぐ船の上で演奏する笛」というイメージを持ちましたので、ステージングは、Apf の背後にガット弦 Vn として相対の配置としました。メインマイクは、私がホール録音では定番となった NeumannKM-133D を Apf に L-C-R, ガット弦 Vn は、A-B ペアとし、ホールの空間は、Sanken CO-100K と CUW-180 というシンプルな構成です。マスターの CH 数と使用するマイク数は基本同じにすることでいわゆるステレオでのワンポイント・マイキングと同様の整った音色が得られます。Play back を聞かれたお二人からも「異なったバランスの楽器から微妙なガット弦のニュアンスがよく出て安心しました。」とコメントをいただきました。本年も受賞の評価をいただきました、審査委員の方々に感謝申し上げ感想とさせていただきます。

○アシスタント・エンジニア：粟飯原　友美　（Winns Mastering）

放送部門　「2ch ステレオ」
（写真は☆印の代表エンジニア）

［最優秀賞］
■作品「SONGS / 中島みゆきトリビュート」より「世情」　クミコ、坂本昌之
日本放送協会　HDTV　stereo　2017 年 6 月 22 日放送

☆ミキシング・エンジニア：野口　康史
（日本放送協会）

〈受賞のことば〉
この度「第 24 回日本プロ音楽録音賞」放送部門（2ch ｽﾃﾚｵ）最優秀賞を頂き、大変光栄に思っております。今回ミックスさせて頂いた世情と言う曲、1978 年にリリースされた中島みゆきさんの曲でシュプレヒコールと言ったあまり耳にしない言葉が歌詞に出てきます。そんな当時の不条理や混沌とした世の中に生きる若者達の葛藤や苦悩をクミコさん、作曲の坂本昌之さんが作りだす音楽がその世界観を見事に再現しました。その時代を経験していない私はミックスをしていて鳥肌が立つほどのパワーを感じました。そして歌詞と相反する美麗なセットで男性コーラス隊に囲まれて歌うクミコさんの姿は言葉に出来ない不思議な感情を視聴者に伝えたのではないでしょうか。TV の音楽録音とは映像と音との調和、相乗効果による総合芸術だと感じております。どんなに小さい TV でも良質な音と映像は視聴者に何かを伝える事が出来ます。丁寧に大切に謙虚にミックスをしてミュージシャンや作曲家と世界観を共有できるエンジニアを目指し日々精進致します。最後に、TV 番組は総合芸術である事を再確認する素晴らしい企画を実現したディレクター陣の皆様、撮影、照明ほか収録でお世話になった全てのスタッフの皆様に厚く御礼申し上げます。

○セカンド・エンジニア：垣内　章宏　　（日本放送協会）
○セカンド・エンジニア：高橋　義洋　　（株式会社ネオテック）

［優秀賞］
●作品「EARTHDAY LIVE 2017」より
「アランフェス協奏曲　～　Spain」　平原　綾香
株式会社エフエム東京 FM　stereo　2017 年 5 月 4 日放送

☆ミキシング・エンジニア：川島　修　（株式会社エフエム東京）
○セカンド・エンジニア：梁取　慎一　（株式会社タムコ）

放送部門　「マルチ ch サラウンド」
（写真は☆印の代表エンジニア）

［最優秀賞］
■作品「プレミアムシアター／二期会公演」より「歌劇「トスカ」」より「テ・デウム 」
今井 俊輔（スカルピア）/ 二期会合唱団 /NHK 児童合唱団 / 東京都交響楽団
日本放送協会　HDTV　5.0ch　2017 年 3 月 13 日放送

写真提供
公益財団法人 東京二期会

☆ミキシング・エンジニア：矢嶌　諭
（株式会社ネオテック）

〈受賞のことば〉

第 24 回日本プロ音楽録音賞の「放送部門　マルチ ch サラウンド」で最優秀賞を頂き、音声技術者として目標を一つ達成できた大きな喜びを感じています。出演された皆様、二期会の皆様、スタッフの皆様、NHK エンタープライズの皆様、その他お世話になった全ての皆様へ心より御礼を申し上げます。

本公演は、ローマ歌劇場との提携により 1900 年世界初演時のデザイン画をもとに作られた趣のある壮麗な舞台と、歌手と合唱団による情熱的な歌唱の数々、そして、オーケストラが織りなす奥行き豊かな演奏で、観客を魅了しました。

目指した音は、その大盛況だったホールの熱気を表現し、客席で鑑賞しているような臨場感を再現することでした。

レコーディングでは、歌手と合唱団の歌声が、舞台奥から客席へ向かって響き渡る立体的な音を、そのまま収音することに拘りました。特に、舞台面には複数のバウンダリーマイクを効率的に配置する他、場面ごとに変わるセットに対応するため、補助マイクとして超指向性のマイクをセットに隠し使用しました。

ポストプロダクションでは、リバーブ機器に極力頼らず、アンビエンスマイクとの繊細な MIX を心がけました。

レコーディング、トラックダウン、マスタリング、MA まで一貫して音声技術を担当でき、目標とする音へ向かって効率良く、丁寧に向き合ったことが、今回の受賞へ結びついたとも感じています。

最後に、ご指導賜りました先輩・同僚の皆様へ感謝申し上げるとともに、今後もより良い音作りを目指して精進してまいります。

○セカンド・エンジニア：庄司　啓太　（株式会社テレビアルファ）

［優秀賞］

●作品「オーケストラ・アンサンブル金沢ニューイヤーコンサート 2017」
「鬼才エンリコ・オノフリ＋華麗なるソプラノ 森 麻季」より
「モテット「踊れ、喜べ、幸いなる魂よ」」
指揮：エンリコ・オノフリ、ソプラノ：森 麻季
演奏：オーケストラ・アンサンブル金沢
北陸朝日放送株式会社　HDTV　5.1ch　2017 年 1 月 21 日放送

☆ミキシング・エンジニア：山﨑　克哉
（株式会社放送技術社 北陸事業所）
○セカンド・エンジニア：山下　耕司　（北陸朝日放送株式会社）
○セカンド・エンジニア：山中　康男　（朝日放送株式会社）

ベストパフォーマー賞

■作品　鈴木雅之「DISCOVER JAPAN Ⅲ～ the voice with manners ～」
（ESCL-4887 ～ 8）より「胸の振り子」 編曲者：服部　隆之　CD
発売元：株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ

編曲者：服部　隆之

〈受賞のことば〉

この度はベストパフォーマー賞を受賞しましたことをたいへん嬉しく思います。しかも編曲家としては初めての受賞ということで、とても光栄に思っています。

受賞曲「胸の振り子」は鈴木雅之さんの DISCOVER JAPAN シリーズの 3 作目に収録されている、祖父、服部良一の楽曲です。霧島昇さんが歌い、石原裕次郎さんをはじめ沢山の方々がカバーされて、どちらかというと少しハイトーン系のロマンティックな解釈が多いのですが、そういう中で鈴木さんがこの曲を歌われるのはある意味ちょっと異色で、彼独特のソウルフルな歌い回しも相俟って、なかなか無い感じの「胸の振り子」になったと思っています。祖父の曲をアレンジするのは身内として、愛を注入していく・・・ということに尽きるのですが、鈴木さんとこの曲はスウィングジャズにすると決めた上で、R&B の匂いがするドラムのパターンを使うことで鈴木さんの色合いが出てきたかと思います。ドリーミーにフワっとした世界にも出来るのですが、それよりはブラスとリズムのエッヂをきちっと立てストリングスはおさえめのミックスにし、ヴォーカルが乗った時にちょうどいい汚れ具合というか・・・ロマンティックでありながらいろいろと奥行きのある世界観に仕上がったと思っています。

昔と比べれば、今の若い方々にとっては、いろいろな音楽に触れ合う機会が格段に増えて、さまざまなスタイルの音楽が受け入れられている土壌が出来ているように思います。そうした中で、これからも楽しみながら、のびのびと仕事をしていきたいと思っています。

今回は本当にありがとうございます。

ニュー・プロミネントマスター賞

■作品「TROPICAL GREEN」（HICC-4234）より
「TROPICAL GREEN」
安次嶺 希和子　CD
発売元：株式会社ハイウェーブ

☆ミキシング・エンジニア：石　光孝
（株式会社ミキサーズラボ）

〈受賞のことば〉

この度は素晴らしい賞を頂きありがとうございます。驚きと共に大変光栄に感じております。

しかしこの受賞はこの楽曲に関わってくださった、安次嶺さん、ミュージシャンの皆様、スタッフの皆々様、多くの方々のお力添えがあってこそだと感じております。一度スタジオでオーケーを頂いた後、どうにも納得がいかない所があり再度ミックスのやり直しをお願いした思い出深い作品でもありました。改めて、いちエンジニアとしてこの楽曲に参加させて頂いたことにとても感謝しております。

今後も人の心に残る作品に携われる様に頑張っていきたいと思います。

■作品「トコワカノクニ」(VIZL-113) より
「レゼトワール」　悠木 碧　DVD-Video　5.1ch
発売元：株式会社フライングドッグ

☆ミキシング・エンジニア：高須　寛光
（株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント）

〈受賞のことば〉

この度はニュー・プロミネントマスター賞という新しい賞を頂きましてありがとうございます。

賞を頂くにあたり、レコーディング時の事を思い出してみました。

この作品は録音、ミックスすべての工程をビクタースタジオでやらせて頂きました。

録音時は声だけで完結するアルバムという事で、本当に誰しもが試行錯誤でありましたが、ビクタースタジオのありとあらゆるマイクを試し、このパートはこれを使おう！このマイクはここに合いそう！と、そこにいたすべての人間が一丸となって録音に挑んだ作品でした。

ミックス時はビクタースタジオのサラウンド用のスピーカーに Genelec の 8351 を導入したばかりでしたが、私も同じ SAM シリーズを普段から使っておりましたので、違和感なく、よりクリエイティブに色々な概念にとらわれる事なくミックスさせて頂きました。

改めて思うのは、素晴らしい環境の中で、クリエイティブに音楽を作れた事が今回賞を頂いた１番の要因だと思っております。

私は今後も人と環境の大切さを忘れずにプロジェクトごとにチーム一丸となって、色々な人に聞いて頂ける音楽を紡ぎ出していきたいと思います。

この度はありがとうございました。

審査委員会

総合審査委員長　内沼　映二	副審査委員長	高田　英男、高橋 邦明
ＣＤ部門および　　審査委員	：	内沼　映二、岡部　　潔、川澄　伸一、北川　照明、
ハイレゾリューション部門		椎名　和夫、塩澤　利安、清水　三義、髙城　　賢、
		高田　英男、高橋　邦明、増田　　晋、松尾　順二、
		松武　秀樹、三浦　瑞生、森元　浩二、脇田　貞二、
		渡辺　昭人
放送部門　　審査委員	：	加藤　茂樹、石野　和男、亀川　　徹、清水　幸男、
		高橋　正勝、深田　　晃

（以上 50 音順）

今回の顕彰内容については、各部門の最優秀作品と優秀作品の制作に携わったミキシング・エンジニア、マスタリング・エンジニア及びベストパフォーマー賞の編曲者に表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈し、セカンド・エンジニア、アシスタントエンジニアには表彰状を贈呈。また、ニュー・プロミネントマスター賞についてはミキシング・エンジニアに表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈。

なお、ＣＤ部門、ハイレゾリューション部門の最優秀賞については、優秀なスタッフと良好な環境を提供されたメインのスタジオについても表彰状とクリスタル製の表彰楯が授与された。

受賞者集合写真

第 24 回日本プロ音楽録音賞 審査委員講評

＜ CD 部門　クラシック、ジャズ、フュージョン＞

（一社）日本音楽スタジオ協会
会長　高田 英男

CD 部門「クラシック、ジャズ・フュージョン」について講評させ頂きます。

今年度応募総数は 25 作品であり、昨年度から 3 作品増えた応募数でした。

受賞されました作品について講評をさせて頂きます。

●優秀賞

作品「ゼルダの伝説 30 周年記念コンサート」より
楽曲「神々のトライフォース 2 ＆ 3 銃士メドレー」
東京フィルハーモニー交響楽団　指揮：竹本泰蔵

マスタリング・エンジニア：山下　由美子　　日本コロムビア（株）
ミキシング・エンジニア：塩澤　利安　　日本コロムビア（株）
セカンド・エンジニア：　川上　真一　　日本コロムビア（株）
発売元　日本コロムビア（株）

マスタリング・エンジニア山下さんからのノミネート作品、山下さんコメントとしてコロムビアオリジナルのマスタリングエフェクターにて音創り、ライブ録音会場の体感が伝わる自然で迫力ある音創りを目指した。

録音＆ミキシングをされました塩澤さんは日本プロ音楽録音賞受賞者としては常連で御座いまして、今年度受賞により 5 年連続での受賞となりました。

録音 2016 年 10 月　東京芸術劇場コンサートホールでのレコーディングです。

音楽制作を担当された任天堂（株）横田真人氏から、ゲーム音楽としてオーケストラ録音する際は、ゲーム全体のテンポ感や世界観に寄り添う作り方をしますが、今回の録音は会場の空気感を限界まで伝える為に、小さな音から大きな音までのダイナミズムや演奏者の息づかいを意識して音創りを進めた。

80 名以上のオーケストラと 70 人を超える合唱の大編成録音ですが、塩澤さんの技術・感性によりクリアーで大迫力のサウンドの中に、木管やバイオリンの繊細なソロが美しく表現され、色彩感豊かな音楽ドラマが伝わってきます。

録音・ミックス～マスタリングまで、コロムビアスタジオの技術の凄さが伝わる作品と感じました。

●最優秀賞

作品「Timeless 20th Century Japanese Popular Songs Collection」より
楽曲「あまく危険な香り」
アーティスト　ケイコ・リー

ミキシング＆マスタリング・エンジニア：鈴木　浩二
（株）ソニー・ミュージックコミュニケーションズ

レコーディング・エンジニア：米山　雄大
（株）ソニー・ミュージックコミュニケーションズ
発売元：（株）ソニー・ミュージックエンタテインメント

鈴木浩二さんは今年度受賞により6年連続の受賞で御座います。
＊第20回でもケイコ・リーさんのアルバムでジャズ・フュージョン部門での最優秀録音賞を受賞。
録音は米山雄大氏により、Pro Tools 96kHz/32bit録音、ミックスは鈴木浩二さんによりニーヴアナログコンソールを使用。

〈鈴木さんコメント〉
ドラム・ベース・キーボードを中心にグルーヴ感、リズム感を大切にし、その前方にしなやかで妖艶なヴォーカルを強調したミックスをしました。

第20回最優秀録音賞、ケイコ・リーさんのアルバムを私自身、モニター確認の基準ディスクの一つとして活用していまして、今回の作品も録音エンジニアとしての音創りを学ぶ、大変素晴らしい作品と感じています。
深く柔らかい低域・心地よいグルーヴ感・説得力のあるヴォーカルのバランスや、創り込んだサウンドの中に自然に伝わる唄声の響きなど、録音技術の深さ＆匠の力を感じました。

纏め
クラシック・ジャズ・フュージョンという音楽部門では、やはりプロ音楽録音賞の常連である鈴木さん・塩澤さんは別格（殿堂入りランク）のエンジニアです。制作及びアーティストからの録音依頼が大変多くあることから、録音技術を磨くチャンスにも恵まれているのでしょうね。今後共、更なる録音技術の魅力を伝える作品創りをお願いすると共に、是非、鈴木さん・塩澤さんに続く次世代のエンジニアの皆様の活躍を期待したいと思っております。

最後になりましたが、受賞されました皆様、本当におめでとうございました。

＜CD 部門　ポップス、歌謡曲＞

日本ミキサー協会
副理事長　森元 浩二

日本ミキサー協会 副理事長、エイベックス・エンタテインメントでレコーディング・エンジニアをやっております、森元 浩二です。今回は、受賞おめでとうございます。

今回審査するにあたり感じたのですが、スタジオに入り、曲を順番に聴いていくのですが、点数を付ける時、最初に何点を付けるかが非常にポイントになって、そこから上過ぎても下過ぎてもだめなので、良い所に付けているつもりなのですが、どれも良くて、なかなかその点数から幅が付けられないということに今年はなりました。

CD が発売されて 35 年経って、それでも録音機器が良くなり続けて、それに対応してレコーディング・エンジニア、マスタリング・エンジニアの技術が向上していると痛感した今回のプロ録でした。

今回の受賞作品はもちろん、応募作品全体に言えるのですが、数年前だと、これはどうやって録ったんだろうとか、アナログミキサーでやってるのか、デジタルミキサーでやってるのか、そういうことが何となく受け取れるような音をしていました。でも、今年はどれを聴いても非常に良い音をしていまして、そのあたりが全然聴き手には関係なくなってきていると思いました。アナログ機器を使っていないからだめだとか、デジタル機器でこのフォーマットでなければだめだとか、もうそういう事を言う時代ではないんだな、というふうに痛感した今年でした。

CD 部門 ポップス、歌謡曲ですが、最近のレコード業界は CD の販売の低迷から、制作費が非常に少なくなっています。それでも予算がないからあきらめようとか、予算がないのでしょうがないとか、そういうあきらめがなく、音楽を良くしていこうという努力が感じられる、制作現場の力を感じた今回の受賞作品、応募作品でした。

今回の作品もすべてハイレゾで制作されていると思います。ハイレゾで作った高音質の楽曲を、レコーディング・エンジニア、そしてマスタリング・エンジニアの卓越した技術で、CD の 44.1kHz/16bit の限られた箱に詰め込むわけですが、その先には MP3 などに圧縮されることも想定して、フォーマットが変わっても音楽そのものは影響されない、というすばらしい音楽達でした。

余談なのですが、私は現場でレコーディング・エンジニアをやっていまして、ミックスダウンという作業をしていますと、アーティストは、最終的に iPhone で聴かせてくれということになります。iPhone のスピーカーで聴いて、あーじゃない、こーじゃない、という注文を受けましてそれに対応するのですが、その時にこういうハイレゾオーディオで聴いた時でも良い音になるように、という努力を日々しております。たぶん、全員が日々されていると思うのですが、それが去年から今年にかけて実ってきたのではないか、と思っています。日本の音はどんどん良くなっていると痛感しました。

これからも、ハイレゾ対応の高級オーディオで聴いても、ポータブルオーディオで聴いても、テレビで聴いても、ラジオで聴いても、余す事なく良い音楽を伝えられる、そんな録音技術をこの賞を通して探究していければいいなと思っております。

今回の受賞作品をスタジオで、車で、ヘッドホンで聴きましたが、どの再生環境でもしっかり音楽が伝わる、素晴らしいエンジニアリングの作品でした。今回は受賞おめでとうございます。

＜ハイレゾリューション部門　2ch ステレオ＞

（一社）日本音楽スタジオ協会
会長　高田 英男

今年度応募作品数ですが、e-onkyo music 様、mora 様の推薦及び、自薦を併せて 32 作品の応募があり、（ノンパッケージ 31、パッケージ 1）で御座います。昨年度は 22 作品でしたので 10 作品の応募数が増えました。音楽ジャンルはクラシック、ジャズ、純邦楽、ポップスと幅広い音楽ジャンルからの応募であり、デジタルフォーマット / スペックですが PCM-96kHz/24 ～ 32bit（19 作品）192kHz/24bit（5 作品）48kHz/24bit（1 作品）PCM-384kHz/32bit（1 作品）11.2MHz/1bit（6 作品）です。

PCM 録音では 96kHz/24bit がメインであり、DSD 録音では DSD11.2M の録音による音楽制作が特徴的でした。

受賞されました作品の講評

●優秀賞

作品「PINK」より
楽曲「PINK」
アーティスト：土岐　麻子　96kHz/32bit
ミキシング・エンジニア：米田　聖　　Studio MSR
マスタリング・エンジニア：小柳　令奈　form THE MASTER
発売元：エイベックス・ミュージック・クリエイティヴ（株）

〈米田さんエンジニアコメント〉

ハイレゾフォーマット録音によって土岐さんの繊細な歌、楽器の空気感が美しく収録されていると思います。

打ち込み系でのハイレゾフォーマット録音は大変興味がありまして、音の印象として、歪感が少なく艶やかで伸びのあるサウンドと感じました。

打込み系サウンドは、打ち込み音源の質感によってサウンドが決まっていきますが米田さんの感性によりストリングス録音にボンマイクを使用、又、歌の一部にフィードバック処理など、アレンジ意図を音創りで更に印象的に仕上げ、土岐さんの心地良い歌のバランスなど、アーティスト・アレンジ・エンジニアが一体となった作品創りと感じました。

尚、ミキシング・エンジニア米田さん、マスタリング・エンジニア小柳さんは初めての受賞であり、次の世代の人の活躍は大変楽しみです。

●最優秀賞

作品「SHAKE」より
楽曲「Purple Rain featuring SUGIZO」
アーティスト：TOKU　96kHz/24bit
レコーディング＆ミキシング・エンジニア：カジャンチ　ニラジ　NK SOUND TOKYO
マスタリング・エンジニア：木村　健太郎　KIMKEN STUDIO
発売元：ソニー・ミュージックレーベルズ

〈ニラジさんコメント〉
ジャズのアルバムよりもロック的サウンド創りを目指しました。TOKU さんは一発録りが好きなのでサウンドチェック無しで録音したものが採用されました。ドラム以外はクリーン系のヘッドアンプを使用、又、ハイレゾを意識してレンジの広い奥行き感ある音創りに仕上げた。

ヴォーカルの TOKU さんの存在感・ギターの SUGIZO さんのロックギターサウンドに引き込まれ、開放感ある音創りでありドラムコンプサウンドも大変魅力的な音創りと感じました。
後半の SUGIZO さんのギターソロ含めニラジさんのアピールポイントにもありましたが、演奏者の中に入って音を浴びる感覚のする音創り、素晴らしいです。

●最優秀賞
作品「Stereo Sound Hi-Res Reference Check Disc」より
楽曲「Greensleeves」
アーティスト：TOMA & MAMI with SATOSHI　384kHz/32bit
ミキシング・エンジニア：高田　英男　（株）ミキサーズラボ
テクニカル・エンジニア：山口　雄
（株）ミキサーズラボ・ワーナーミュージック・マスタリング
アシスタント・エンジニア：加藤　拓也
（株）ミキサーズラボ・ワーナーミュージック・マスタリング
発売元：（株）ステレオ・サウンド

この作品は私自身がエンジニアを担当した作品ですので、この Stereo Sound Hi-Res Reference Check Disc 制作についてお伝え致します。

ハイレゾフォーマットによる録音が日常化される中、サンプリング周波数の変化（fs）・音の分解能 (bit) 変化により音質はどの様に変化するのか、又、DSD 録音と PCM 録音の音質的特徴はどの様な特徴があるのかなど、録音技術及びハイレゾ再生技術において一つの音質的基準となる音源制作を目指しました。
５台の DAW をスタジオに持ち込み、各サンプリング周波数やビットレンジを別々に設定、ダイレクト 2ch 一発録音・編集無し・マスタリング無しのコンソール出力を同一条件にして録音した音源です。
ハイレゾフォーマットの魅力としては、サンプリング周波数が高くなるほど歪感は少なくピュアな音になり、ビットレンジ分解能が深くなれば音色が柔らかく素直で音の芯が明確となります。
この Fs の拡張と bit レンジの深さの相乗効果でハイレゾフォーマットによる音の魅力が創られると感じました。
又、音質の変化を感じ取る為には、演奏して頂くアーティストの力が大きく、今回演奏して頂きました TOMA & MAMI with SATOSHI の音楽的魅力によりこの企画が成功したと感じております。

纏め
今回 2ch ハイレゾ部門は 32 作品が応募され、音楽ジャンルもクラシック・ジャズ・純邦楽・ロック＆ポップスと多様なジャンルの中での評価であり、大変難しい審査でした。

併しながら、どの音楽ジャンルの作品もハイレゾフォーマットの器の魅力を上手く使っており、CD 時代から確実に一歩深くなったデジタルの音世界を感じた次第です。
　最後になりましたが受賞されました皆様、本当におめでとうございました。

＜ハイレゾリューション部門　マルチ ch サラウンド＞

（一社）日本音楽スタジオ協会
監事　清水 三義

　スタジオ協会清水でございます。
　ハイレゾリューション部門：マルチ ch サラウンドの作品につきまして講評させて頂きます。
　まず、今年度の応募数ですが、SACD 作品が２，DVD-Video 作品が 1、192kHz/24bit のノンパッケージ作品が４、合計で７作品の応募が有りました。

　７作品のジャンルは、クラシックが６作品、その他１作品でした。

　さて、最優秀賞に選ばれました沢口音楽工房代表、沢口真生 (マサキ) さんの応募曲「Contigo en La Distancia 遠く離れていても」ですが、
　演奏は Violin 喜多直毅　Piano 田中信正
　フォーマットは 192kHz/24bit　5.0ch サラウンド ノンパケージ作品です。
　ミキシング＆マスタリング・エンジニア共に沢口さんご本人です。

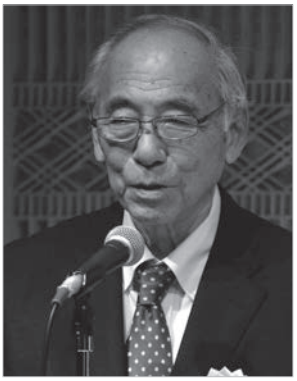
　沢口さんは、UNAMAS というレーベルを主催され、ご自身で企画制作、エンジニアもされ、独自のハイレゾ・サラウンド作品を創られていますが、一昨年はバッハの「フーガの技法」、昨年はシューベルトの 弦楽四重奏曲で受賞され、今回で３年連続の受賞となります。

　この遠く離れていても～を聴いて思う事は、静寂のなかから湧き出てくるようなピアノの美しさ、そのピアノの空間を独特の魅力を持つバイオリンが情熱的に歌っている。そんな印象を受けます。
　Violin の喜多さんはクラッシックの方ですが、アルゼンチンに渡りタンゴを学ばれた事もあり、また、弦には昔ながらのガット弦を使用しているそうで、喜多さんの魅惑的な奏法、繊細で豊かな Violin の特徴が良くとらえられています。
　バイオリンは弦と弓の触れ合う繊細な部分までフォーカスされており、解像度の良いリアルな音像です。一方、ピアノは少し奥の空間にいてバイオリンのようなリアルさはないが大変美しい。このバイオリンとピアノの距離感、対比が美しさと共に情熱的なサラウンド空間を創り出しています。
　このような音楽空間の裏付けとして技術資料を見ますと、バイオリン、ピアノには解像度のよい無指向性デジタルマイクを選び、響きを録るサラウンドマイクには高域特性に優れた無指向性マイクを使用し、録音機材には音の劣化を防ぐ光伝送システムを採用したそうです。また、それら機材の電源にはノイズを排除するために大容量のバッテリー電源から供給し、それらを結線するコネクターやケーブルにも特別なノイズ対策を行い、さらに、機材の振動対策も施したそうです。

このような沢口さんの音に対する徹底した対策の積み重ね、そして、豊富な経験に裏打ちされた技術力が今回の受賞に繋がったと思います。多くの方々に聴いて頂きたい優れた作品です。

おめでとうございます。

＜放送部門　2ch ステレオ／マルチ ch サラウンド＞



音響ジャーナリスト
（株）マクス 代表取締役
加藤 茂樹

本年の応募状況は、2ch ステレオ部門が 13 作品、うち FM 2 作品、マルチ ch サラウンド部門 15 作品と、毎年参加局が増加していることは喜ばしい。

各部門、それぞれ最も標準的と思われる環境でモニターした各作品は 2ch ～マルチ ch を問わず全て見事な出来栄え。全作を通じて感じたのはそれぞれ対象となる音楽作品を最もふさわしい音響構造として完成している点で、実はこのことは音楽録音の原点ともいえる。特に選出された各部門の計 4 作品はこの点に於いて殆ど注文したいところはないといってよい。

近年、聴取環境が多極化してリスナーは思い思いの機器を使うことが多い中、良い録音、的確な録音は対象の伝えたい情報を聴取環境に左右されることなく、すぐれた伝送効果を上げているといえる。

私見ではあるが、近い将来 再生環境 メディアの多極化に対応することを目指す良い録音のありかたについて考える必要が生ずることもあるだろう。その時に原点となるのはやはり、ここに参加した作品の様なオールマイティーな良い録音であろう。

今年参加された方々のますますの研鑽を望むところである。

放送部門　2ch ステレオ　優秀賞

エフエム東京「EARTHDAY LIVE 2017」より
「アランフェス協奏曲～ Spain」平原 綾香

ホアキン・ロドリゴの“アランフェス協奏曲”を導入部においてスペインを描写したチック・コリアの楽曲がこの番組（EARTHDAY LIVE 2017）の主旨にふさわしい。オープニングのギターの陰影のある音色は演奏者の解釈とも思えるが、録音上の音作りの主張でもあろう。まさにアランフェスのイメージによりそっている。

個性的なシンガー／平原綾香の鋭い Vo もこのアレンジのねらいをひきたてる。Perc をシャープに大きめに扱ったところも現代のスパニッシュのイメージや熱いリズムを感じさせる。パーカッションを際立たせた“SPAIN”の展開は、チック・コリアのオリジナルのイメージを感じさせながら現代のジャズの音作りの一端を示した点が斬新。Vo や Perc を際立たせた展開に対応したレベル管理が適切で、FM の D レンジの中に収めきっているところが素晴らしい。

FM の聴取環境を考えたとき、変調レベルの平均化という観点で好ましい結果をもたらす。加えてこの音楽の内容をより際立たせている点にも注目したい。

「情熱の SPAIN」をアピールしきった音作りとピーク管理とがもたらす音声放送番組としての完成度に高評価。つけ加えるならば、構成する各々の楽器のナチュラリティも音声放送番組らしく好感がもてる。

放送部門　2ch ステレオ　最優秀賞

NHK HDTV「SONGS / 中島みゆきトリビュート」より
「世情」 クミコ、坂本昌之

明瞭度の高い Vo は定位感も正確で映像とともに深味のある導入部で先ず引きつけられる。G と Vo だけのシーンは短いがやがてくる盛り上がりを予感させた上手な作り方である。アレンジと演奏がねらうこの曲のスケール感を期待させるのに十分なものがある。オーケストラが加わるところの自然な音の流れと空間表現がこの曲を盛り上げている。スタジオライブだと思われるが、臨場感が素晴らしく 2ch ステレオでの表現を限界までつきつめてドラマチックなサウンドとして提供していることころが素晴らしい。録音における楽曲の解釈が的確で、中島みゆきとは別次元の世界へと進んで行く。Perc が加わるところで心地よい緊張感が漂い、曲はいよいよ佳境に入る。Perc の遮音板の存在で分離のきいた音場を作っているので整然とした音楽空間を想起させるが、Perc 類はもうすこし他の楽器音にかぶった作り方もきいてみたかったが・・・。
男性コーラスが湧き上がって音場は一気に大スケールを提供するが、クミコの Vo が硬質なイメージで溶け込み、クライマックスへ感動的に このあたりの音のスケール感とドラマチックな状況がこの楽曲のそしてクミコの世界を描いている。
大編成コーラスの中でクレッシェンドするクミコの Vo 超指向性ワイヤレスマイクの使い方も正統的で優れた効果を上げている。
趣向の異なるいくつかの音楽シーンを重ねた構造のアレンジを違和感なくまとめた MIX の考え方に共感する。

放送部門　マルチ ch サラウンド　優秀賞

北陸朝日放送　HDTV
「オーケストラ・アンサンブル金沢ニューイヤーコンサート 2017」
指揮：エンリコ・オノフリ　ソプラノ：森 麻季
モテット「踊れ、喜べ、幸いなる魂よ」

響きの自然さ ソプラノの艶やかさ 集合体としてのオーケストラの臨場感と個々の楽器のディテイル…現代のクラシック・アンサンブルが目指すサウンドの要素が素直に自然に盛り込まれている点が印象に残る。これらの要因が重なり合うところに音の美しさが生まれ、楽曲の目指すひたすら楽しく幸せな雰囲気が空間を埋めつくす。
ソプラノの自然で色彩にあふれた美しさとオーケストラののびのびとした屈託のない音の重なり合いと豊かな色合いがこの演奏のねらうところだとすれば、その雰囲気や気配の様なものがあちらこちらにちりばめられ、曲想を華やかに表現する。ソプラノとオーケストラの位置関係 遠近の空間的 音色的な特徴が効果的に表出されるのは、サラウンドによる響き 臨場感の収録と制御によるところが大きいかと思われる。
表面的な艶やかさ 色彩感の見事さだけでないこのアンサンブルの個性 音楽に対する向き合い方などがそこに聴こえてくるのは、やはり MIX の巧みさに負うところが多い。
録音レベルの設定 空間の設定など、技術的にも優れた点を多く内包した素晴らしい録音である。

放送部門　マルチ ch サラウンド　最優秀賞

NHK HDTV「プレミアムシアター／二期会公演」
歌劇「トスカ」より「テ・デウム 」

マルチ ch が最も似合うパフォーマンスはオペラであることをあらためて強く印象付ける音響作品である。TV 放送で東京文化会館の中継番組はそれだけでも難しい。
この番組がねらった音作りは文化会館の理想の客席（S 席）での音響をねらったものという。ステージ上のセリフ 歌唱 ステージ上にしつらえた楽器群の明瞭且つ臨場感に富んだ音源の収録では、スケール感とオペラのストーリーを紡ぐ出演者 主演者の歌とセリフこれらがどのように調和できるかで大きく仕上がりに係わって来る。
また、これらを高音質で良いバランスでまとめるかが出来栄えで決まる。
本作プッチーニの“トスカ”は出演者も多く、音の構成としての複雑さとスケールの大きさで定評のある大作といえるのだが、その点をステージ上の演技 歌唱はバウンダリーマイクを多数的確に配置するほか、舞台のセットに超指向性のコンデンサマイクを仕掛けてストーリー展開のメイン部分をまとめ、オーケストラピット内の変則な編成の楽団を程よいバランスで収録し見事に再現する。
スペクタクルなオペラのステージをサラウンド音場として、スケール感の補強だけでなく臨場感としてオペラの全貌「テ・デウム」のシーンを深い音楽性とともに表現した。
事前のコンセプトのイメージの検討にはじまり楽曲の構成等とマイクアレンジの検討実施に向かっての機材とその配置まで準備段階での努力のあとが伺える。
単に音がいい…とか録音技法が優秀であるとかの評価とは別に、この音響作品にはオペラの内面までもみせてしまう生々しい迫力が感じられた。

後記

私見だが今回はサラウンド作品が全放送部門の参加作品の半数を超えたが、中にサウンド・ドキュメントないしは音響構成とでもいうべき異色作品が登場した。
「命あふるる神々の森～五十鈴川を行く」というものだが、妙に気になるところがあり音楽番組としてこのイベントに参加したもので採点しにくいというのが殆どの審査員の意見だったが、自然環境とオリジナル音楽にナレーションが同じ比重で加わった映像作品は完成度次第では視聴者の心に直接触れ合う様なところもある。
かつてもてはやされた環境音楽 環境映像の流れも汲む現代版だろうが、本音楽録音賞にはなじまないところも、なしとしないが気にとめておきたかった。

＜ベストパフォーマー賞＞

（一社）演奏家権利処理合同機構 MPN
理事長　椎名 和夫

服部さん、おめでとうございます。

プロ録も今年で24回目ということですが、ベストパフォーマー賞というのができたのが、確か2007年ということでございますので、今年で11回目ということになります。その中でアレンジャーの方が受賞されたというのは初めてということで、僕もアレンジャーの端くれとして活動しておりましたので、非常に自分のことのように嬉しく思っています。

審査講評とかいいましても、あーじゃこーじゃ薀蓄をいえるようなガラではありませんので、あくまでも“感想”ということで少しお話しをしたいと思います。

アレンジャーの仕事の醍醐味というのはですね、アーティストや原盤サイドのイメージやコンセプトというのは、あくまでも絵に描いた餅でございますので、それを初めて具体的な音にして提示するという、まあ少しオーバーに言うとですね、まっさらな白い紙に最初に筆を下ろす立場にある､その辺りが醍醐味なんじゃないかなという風に思っています。

勿論いろんな方法論がありまして、小節とコードぐらいを書いた譜面を基に、出たとこ勝負でやるような収録もありましょうし、結構きっちり書いた譜面を基に、逆にそこを膨らませていくというようなやり方があるわけですけど、僕はバンド出身なので、どちらかというと前者に近いようなアプローチでずっとやってきて、その中でも弦とかブラスというのが結構好きで、あれこれやったりしていたのですが、やっぱり見よう見まねの域を出ませんで、服部さんのように引き出しがいっぱいあるのはうらやましいなと、つくづく思っております。

今回の作品ですけれど、ストリングスもブラスも入った中でですね、各楽器の出入りとか仕掛けとかがきっちり整頓、整理されている一方でですね、ボーカルはもちろんですけれど、ドラムのグルーヴとかストリングスのメリハリとかですね、バリトンサックスがブリブリとツボでいってたりとか、そういう五感に直接訴える部分もきっちりと網羅できているという意味で、ある意味で言ったら文武両道といいますか、そんな所に僕ら審査員はやられちゃったんじゃないかなという風に思います。

世の中に残っていく曲っていうのはスタンダードなんていう言い方をしますけれど、様々なアーティストが様々な解釈で歌い継いでいくという時に、最初に筆を下ろすのはやっぱりアレンジャーなわけですね。そういう意味で、またお爺様の服部良一さんの曲ということもあってですね、きっと最初に音を出された時はいろんな思いがあったんじゃないかなという風に推察するんですが、服部さんは受賞のコメントの中で、愛を注入したという風に書かれておりまして、その愛に僕らまでやられてしまいました。

今、音楽の種類も多様化して、いろんなフィールドが競い合うような状況が生まれています。またテクノロジーの進歩で音楽に触れる機会が拡がっていく中で、音楽そのものがどんどん無料化してしまっていることについては、音楽産業をスポイルするもんじゃないかという風に、兎角ネガティブに捉えがちなんですが、服部さんは受賞のコメントの中で、イヤイヤ、いろんなサウンドにみんなが触れる機会が増えたという風にポジティブに考えればいいんじゃないか、というようなことをおっしゃっていて、この辺りもなるほどな、と思った次第です。まあ、このネガティブとポジティブのバランスの中でですね、今後もこのプロ録音賞が進んでいくんじゃないか、という風にも思った次第です。

これからも腕によりをかけて、是非日本の音楽シーンを色彩豊かで楽しいものにしていっていただきたいという風に、心から思っております。

服部さん、本日はおめでとうございました。

（一社）日本音楽スタジオ協会
名誉会長　内沼 映二

＜ニュー・プロミネントマスター賞＞

ニュー・プロミネントマスター賞の１作品目は、
ＣＤ部門　ポップス、歌謡曲の応募作品から、
アルバム「TROPICAL GREEN」より「TROPICAL GREEN」
アーティスト　安次嶺 希和子
ミキシング・エンジニアは（株）ミキサーズラボ・石 光孝さんです。

この作品は、今年からご協力して頂いています「ミュージック・ソムリエ協会」さんからの推薦作品です。

独特な声質とラップ・ボーカルをドライな音創りで表現している作品ですが、安次嶺さんのボーカル・サウンドは、Ａ，Ｂメロとサビを変えることにより、曲をより高揚させています。

また、ラップ・ボーカルは、普通ならばダンス・ビートの打ち込みが定番ですが、アコースティック・ギターを中心にしたアコースティック・サウンドの中に、安次嶺さんとラップがうまく共存された作品に仕上がっています。

また、オケに於いても、アコースティック・ギターなど、各楽器の音色感を大切にした音創りで、楽曲のアレンジ構成の意図を、ミキシングにより魅力的なサウンドに仕上げていると思います。

ニュー・プロミネントマスター賞の２作品目は、
ハイレゾリューション部門　マルチ ch サラウンドの応募作品から、
DVD-Video「トコワカノクニ」より「レゼトワール」
アーティスト　悠木 碧
ミキシング・エンジニアは（株）JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメントに所属している高須 寛光さんです。

この作品は悠木 碧さんの一人多重録音のアカペラ作品です。

先程、聴いていただきましたが、サラウンド効果を最大限に駆使した作品です。

クラシックのサラウンドとはまた違った、３６０度の立体的音場空間を創作しています。

多重録音のパートごとにマイクを変えたり、ダミーヘッドマイクを利用したりして、ライブ感と幻想空間を創りだしています。エンジニアの感性と創造力がとても光った作品です。

ニュー・プロミネントマスター賞にふさわしい作品と思います。

これからの高須君の活躍に期待をしています。

「音の日のつどいパーティー」レポート

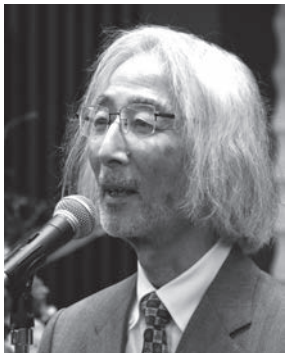
平成 29 年 12 月 6 日（水）「音の日」記念イベントとして、18:00 より目黒雅叙園 4 F「飛鳥」に於いて、当協会および一般社団法人日本オーディオ協会、日本ミキサー協会、一般社団法人日本レコード協会、一般社団法人演奏家権利処理合同機構 MPN の共催により、第 24 回日本プロ音楽録音賞授賞式関係者と当日併行して開催された 一般社団法人日本オーディオ協会主催の「音の匠顕彰式」および「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」関係者が参加した「音の日のつどいパーティー」が開催された。

当日の模様を以下にレポートさせていただきます。

（一社）日本レコード協会
理事・畑 陽一郎氏

経済産業省 コンテンツ産業課
課長補佐 伊藤 桂氏

日本プロ音楽録音賞授賞式の司会に続き、進行役は石川 みゆき氏が務め、最初に一般社団法人日本レコード協会・畑 陽一郎理事より来場者に対して開会の辞が述べられ、続いて来賓代表として経済産業省商務情報政策局 コンテンツ産業課課長補佐 伊藤 桂氏が挨拶された後、音の日実行委員長の森 芳久氏より、本年度の「音の匠」として顕彰された内容が以下の通り紹介された。



「音の日」実行委員長
森 芳久氏

平成 29 年度 第 22 回「音の匠」は、アビーロードスタジオやビクタースタジオなど、国内外の著名音楽スタジオ設計に長年にわたり携わり、音楽録音文化に多大な貢献をされました、豊島政実氏が「音の匠」として顕彰されました。

続いて、「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」の受賞者が紹介された後、第 24 回日本プロ音楽録音賞に於いて表彰された各部門の受賞者を代表して、最優秀賞に選定された代表エンジニア６名、ベストパフォーマー賞１名およびニュー・プロミネントマスター賞２名が紹介された後、エンジニアを代表して、日本放送協会 野口 康史氏が挨拶を述べられた。

「音の匠」受賞者
豊島 政実氏

ＣＤ部門「クラシック、ジャズ、フュージョン」
　鈴木　浩二 氏
　（株）ソニー・ミュージックコミュニケーションズ
ＣＤ部門「ポップス、歌謡曲」
　内田　孝弘　氏
　（株）JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント
ハイレゾリューション部門「2ch ステレオ」
　高田　英男　氏　　（株）ミキサーズラボ
ハイレゾリューション部門「マルチ ch サラウンド」
　沢口　真生　氏　　（有）沢口音楽工房
放送部門「2ch ステレオ」
　野口　康史　氏　　日本放送協会
放送部門「マルチ ch サラウンド」

矢嶌　諭　氏　（株）ネオテック
ベストパフォーマー賞
服部　隆之　氏
ニュー・プロミネントマスター賞
石　光孝　氏　（株）ミキサーズラボ
高須　寛光　氏
（株）JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント

内沼名誉会長

（一社）日本オーディオ協会
校條亮治会長

野口　康史氏挨拶の後、一般社団法人日本音楽スタジオ協会 名誉会長 内沼 映二氏による乾杯の発声が行われ、歓談タイムとなる。会場内では受賞者を取り囲んでの写真撮影や談笑する場面が見受けられ、今年も様々な音のプロフェッショナルな方々が一同に会する場となりました。最後に中締めの時間となり、一般社団法人日本オーディオ協会 会長 校條　亮治氏より、参加者に対して御礼の挨拶が述べられた。

今回もプロ音楽録音賞の運営委員会および審査委員の皆様をはじめ、多くの関係者のご協力により、第 24 回目を無事に終了することが出来ました。有難うございました。

会　員　動　向

1．会員数（平成 30 年 1 月 1 日現在）

正会員（法人）	22 法人	準会員	2 法人
正会員（個人）	16 人		
賛助会員Ⅰ	44 法人	賛助会員Ⅱ	2 法人

2．入会

①個人正会員

○静永　秀宏　　平成 29 年 7 月 1 日

○目等　　進　　平成 29 年 9 月 1 日

②賛助会員Ⅰ

○伊藤忠ケーブルシステム株式会社　　平成 29 年 10 月 1 日

○株式会社ジェネレックジャパン　　平成 29 年 11 月 1 日

3．退会

①法人正会員

○株式会社宝塚クリエイティブアーツ　　平成 29 年 9 月 31 日

②個人正会員

○小池　康之　　平成 29 年 7 月 31 日

4．法人・会員代表者および住所変更、その他

①法人正会員

○住所変更

株式会社エスアイプロジェクト

〒 141-0031　東京都品川区西五反田 4-27-10 印刷産業ビル 5F

TEL:03-6417-4461 FAX:03-6417-4469

②賛助会員

○法人名変更

（旧）学校法人名古屋安達学園 専門学校名古屋ビジュアルアーツ

（新）学校法人東京安達学園 専門学校名古屋ビジュアルアーツ

○法人代表者変更・住所変更

株式会社アユート

（旧）渡辺　慎一

（新）王　夢周

〒 113-0034　東京都文京区湯島 3-14-9　湯島ビルヂング 8F

○法人代表者変更

日本音響エンジニアリング株式会社

（旧）静永　秀宏

（新）山梨　忠志

○会員代表者変更

株式会社ズーム

（旧）野澤　文明

（新）佐藤　貴之（セールスグループ チームリーダー）

○会員代表者変更
学校法人大阪創都学園 キャットミュジックカレッジ専門学校
（旧）串間　司
（新）岡本　真由子（教務部）
○会員代表者所属本社移転
株式会社シンタックスジャパン
〒389-1104　長野県長野市豊野町浅野 1777 番地 1-2
TEL:026-217-6883 FAX:026-217-6884

5．その他
○部署名変更・新担当者
（旧）経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課
（新）経済産業省商務情報政策局コンテンツ産業課
山田　仁（課長）
三浦　奈緒（映像・音楽・広告担当）
○理事長変更
一般社団法人 特定ラジオマイク運用調整機構
（旧）田中　章夫
（新）渡邉　邦男
○代表取締役社長変更
日本コロムビア株式会社
（旧）吉田　眞市
（新）阿部　三代松

♪　編　集　後　記　♪

「勝者と敗者以外に不敗がある」勝った訳でないが負けてもいない。そんな状況が最高とおもう……
　本年もよろしくお願い申し上げます。

Smith

昨年は、内外ともに明るい話題の少ない一年でしたが、12月に入ってロスアンゼルス・エンゼルスに入団した大谷投手の入団会見は、非常に好感が持てました。
二刀流、どこまで故障無く成績を残せるか楽しみです。
会員の皆様にとって、良き一年でありますように。

hair ken short

あっと言う間の半年でしたが、多くの再会の機会に恵まれました。温故知新、あらためて実感する毎日です。本年もよろしくお願いいたします。

yakiton

明けましておめでとうございます。新たな気持ちで少しずつでも前進して行けたらと思います。本年も宜しくお願い申し上げます。

mm

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊総　務　委　員　会＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

委員長　清水　三義（青葉台スタジオ）
委　　員　佐藤　賢一（事務局）
〃　　内藤　重利（　〃　）
〃　　伊東　真奈美（　〃　）

＊＊＊

【発行人】会　長　　高田　英男　　【発　行】2018年（平成30年）1月
【発行所】一般社団法人　日本音楽スタジオ協会
〒169-0072 東京都新宿区大久保２丁目１番11号　モナーク大久保３F
TEL. 03－3200－3650　　FAX. 03－3200－3660
http://www.japrs.or.jp　　E-mail:japrs@japrs.or.jp
【編　集】総　務　委　員　会　　【印刷所】株式会社研恒社

JAPRS

Japan Association of Professional Recording Studios
http://www.japrs.or.jp E-mail:japrs@japrs.or.jp